

神戸市東灘区

深江北町遺跡(II)

県公営住宅深江札場団地建替事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1991.3

兵庫県教育委員会

神戸市東灘区

深江北町遺跡(II)

県公営住宅深江札場団地建替事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1991.3

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は兵庫県都市住宅部住宅建設課の依頼を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した、神戸市東灘区深江北町3丁目7に所在する深江北町遺跡（E区）の発掘調査報告書である。深江北町遺跡（A～D区）については、昭和59年から昭和61年にかけて発掘調査されており、その結果は兵庫県文化財調査報告 第54冊『深江北町遺跡—県営神戸深江団地建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』として、昭和63年に兵庫県教育委員会から刊行されている。
2. 調査地の國土座標は第V系に属する。
3. 挿図中の方位は全て磁北で、真北は磁北に対して $N\ 6^{\circ}\ 38' E$ 、座標北は $N\ 7^{\circ}\ 10' E$ である。
4. 標高は東京湾海水準（T.P.）を基準とした。
5. 全面調査は兵庫県教育委員会が、関西建設株式会社に委託して実施した。
6. 遺構写真は、調査担当者が、遺物写真はサンスタジオ株式会社が撮影した。
7. 本文の執筆は村上賢治・藤田淳・甲斐昭光が分担した。
8. 本報告書の編集は村上が行った。
9. 深江北町遺跡（E地区）の調査に関する遺跡調査

番号は、次の通りである。

第1次確認調査 880063

第2次確認調査 880046

全面調査 890004

10. 本報告書にかかる出土遺物及び図面・写真等の資料は、兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）並びに兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水字立合池ノ下650-1）で保管している。



遺跡の位置

本文目次

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過	(1)
第2節 調査と整理の体制	(4)
1. 調査の体制	(4)
2. 整理の体制	(5)

第2章 遺跡をとりまく環境	村上 (6)
---------------------	--------

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要(層序・面数など)	藤田 (9)
第2節 弥生・古墳時代の遺構	甲斐 (13)
第3節 中世の遺構	藤田 (21)
第4節 近世の遺構	村上 (26)
第5節 出土遺物	
1. 弥生時代の遺物	甲斐 (29)
2. 古墳時代の遺物	甲斐 (35)
3. 中世の遺物	藤田 (36)
4. 近世以降の遺物	村上 (39)

第4章 まとめ	村上 (42)
---------------	---------

挿 図 目 次

第1図 調査地区位置図	(1)
第2図 確認調査・全面調査の位置	(2)
第3図 周辺の遺跡	(7)
第4図 調査地区 地区割図	(9)
第5図 パネルダイヤグラム	(11)
第6図 弥生・古墳時代の遺構	(14)
第7図 掘立柱建物 1	(15)
第8図 掘立柱建物 2	(16)
第9図 土壙 2	(17)
第10図 土壙 5	(18)
第11図 土壙 6	(19)
第12図 土壙 7	(20)
第13図 土壙 8	(20)
第14図 中世の遺構	(22)
第15図 掘立柱建物 3	(23)
第16図 土壙14（上）・土壙15（下）	(24)
第17図 E 2 区 水田遺構	(25)
第18図 水田遺構 南西端の土層	(26)
第19図 近世の遺構	(27)
第20図 溝 6・7 断面	(28)
第21図 掘立柱建物 1 出土遺物	(29)
第22図 土壙 1・2・5 出土遺物	(30)
第23図 土壙 6 出土遺物	(31)
第24図 土壙 7・8 出土遺物	(33)
第25図 包含層出土遺物	(34)
第26図 古墳時代の遺物	(35)
第27図 中世の遺物	(37)
第28図 土錐	(38)
第29図 土錐計測表	(39)
第30図 近世以降の遺物（1）	(39)
第31図 近世以降の遺物（2）	(40)
第32図 銭・砥石	(41)

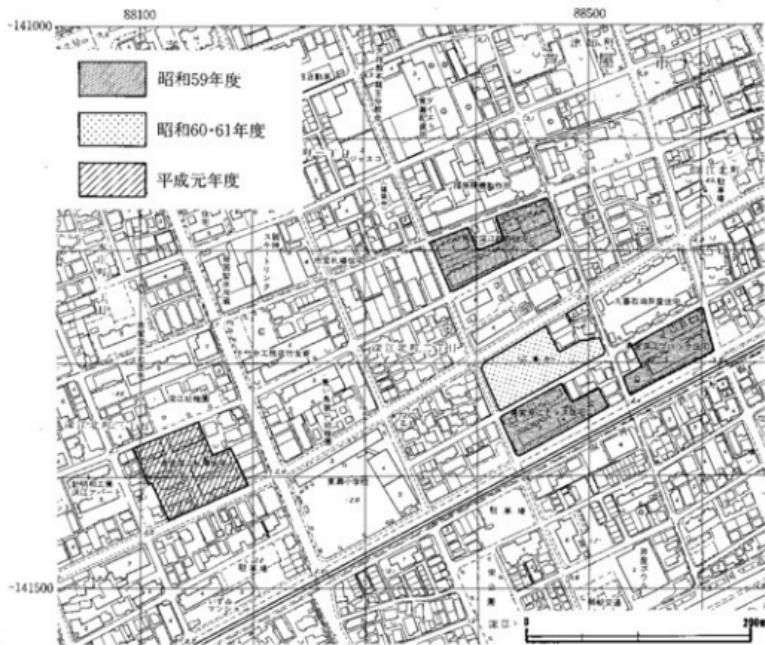
図 版 目 次

- 図版1 全面調査 上 気球写真（全景）
下 気球写真（北から）
- 図版2 E 3区 上 全景（東から）
下 掘立柱建物1（南から）
- 図版3 E 3区 上 柱穴1（西から）
下 掘立柱建物2（南から）
- 図版4 E 3区 上 土壙3完掘状況（南から）
下 土壙5完掘状況（南から）
- 図版5 E 3区 上 土壙6検出状況（東から）
下 土壙6完掘状況（東から）
- 図版6 E 3区 上 土壙7 全景
下 土壙7 土器出土状況
- 図版7 E 2区 上 水田面（南から）
下 水田南端 土層断面（東から）
- 図版8 E 2区 上 献状遺構 検出状況（南から）
下 献状遺構 完掘状況（南から）
- 図版9 E 2区 上 献状遺構 完掘状況（北から）
下 溝6 完掘状況（東から）
- 図版10 E 1区 上 溝7 完掘状況（西から）
下 下層（西から）
- 図版11 出土遺物1 上 掘立柱建物1, 土壙1・2出土土器
下 掘立柱建物1出土土器
- 図版12 出土遺物2 土壙6出土土器
- 図版13 出土遺物3 上 土壙7・8, 包含層出土土器
下 土壙6・8, 包含層出土土器
- 図版14 出土遺物4 上 包含層出土の弥生土器
下 包含層出土の古墳時代の土器
- 図版15 出土遺物5 上 中世の遺物1
下 中世の遺物2
- 図版16 出土遺物6 上 土錐
下 近世以降の遺物

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

県営住宅の老朽化に伴って、兵庫県都市住宅部住宅建設課では順次建替計画を進めており、この計画に伴って県営深江札場団地も低層住宅から9階建ての高層住宅へと建替えられることとなった。埋蔵文化財の有無についての照会が、同課から兵庫県埋蔵文化財調査事務所にあった。深江北町遺跡については、昭和59年度にA・B・D地区が、昭和61年度にC地区の全面調査が実施され、A・B地区では集落跡が、C地区では集落跡と円形周溝墓群が、D地区では水田遺構が検出された。いずれも県営住宅の建替工事に伴う調査である。これらの調査結果から深江札場団地の敷地内にも遺跡が存在する可能性が大きかったため、解体工事に先立って2度



第1図 調査地区位置図

の確認調査を実施した。

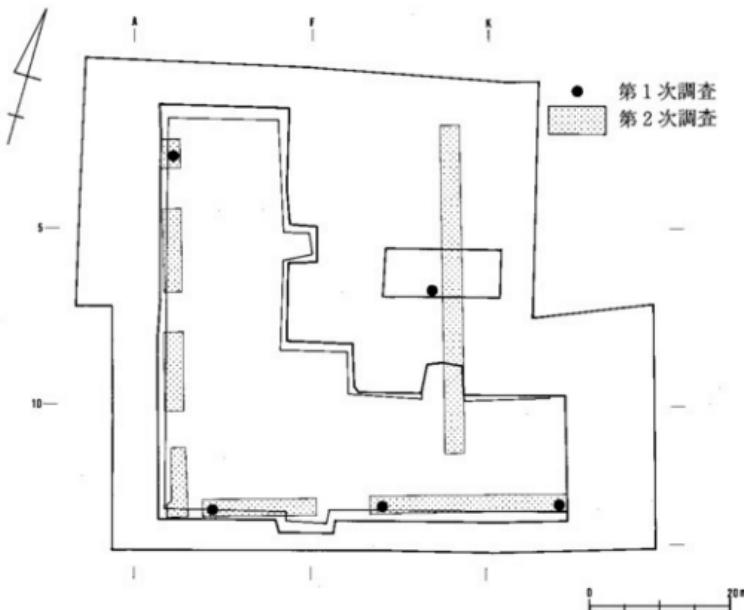
第1次確認調査（昭和63年9月28日）

調査は、兵庫県都市住宅部住宅建設課が作業員・機械などを用意し、埋蔵文化財調査事務所は職員を派遣して実施した。

調査の方法は、バックホーで掘削し、遺構・遺物が検出された時点で人力により壁面及び平面の精査を行うものであった。県営住宅の敷地内に遺跡が存在するかどうかを確認するため、5箇所を掘削し精査を行った。その結果、遺構埋土と思われる土層の堆積や遺物が検出されたため遺跡の存在する可能性が大となった。そのため第2次の確認調査を実施する事となった。

第2次確認調査（平成元年3月23日～3月30日）

第1次確認調査の結果をもとに、遺跡の範囲・性格をより詳細に判断するため、旧住宅の解体前に第2次確認調査を実施した。調査は、第1次確認調査と同じく、埋蔵文化財調査事



第2回 確認調査・全面調査の位置

務所は職員の派遣のみを行った。

調査は、県営住宅敷地の東端・南端・西端にそれぞれトレーナーを設定し、前回と同様バックホーで掘削し人力で壁面及び平面の精査を行う方法で実施した。その結果、No. 1 トレーナーでは中世の溝状の落ちと古墳時代の柱穴を検出した。No. 2・No. 3 トレーナーでは南寄りで柱穴を検出し、中央部から北にかけては水田層を検出している。

全体として敷地内では、南半分に溝・柱穴を伴う集落跡が、北半分は砂堆から後背湿地への変換点であり、水田跡が認められた。以上の結果から、全面調査が必要との判断を下した。

全面調査（平成元年7月20日～10月13日）

確認調査の結果、建設予定地内全域に遺構が存在することが判明したので、兵庫県都市住宅部住宅建設課と発掘調査に関する委託契約を結び、全面調査を実施した。第2次確認調査の結果から予想したように、調査範囲の北半分では中世の水田跡を、南半分では弥生時代の集落跡を検出した。また水田跡の上層には近世の畠跡を検出し、全体として3時代に渡る遺構を調査した。

遺構掘削終了後、写真エンジニアリング株式会社に委託し、気球による空中写真撮影を実施した。

なお調査中の9月14日には、阪神間の集中豪雨のため、阪神深江駅周辺は小河川や溝が氾濫し、遺跡の周囲でも床上・床下浸水の被害があった。この時には、調査現場も完全に水没し、排水に3日程要した。



水没した調査現場



気球による写真撮影

第2節 調査と整理の体制

1. 調査の体制

発掘調査は、兵庫県都市住宅部住宅建設課の依頼を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。調査体制は次のとおりである。

第1次確認調査（昭和63年9月28日）

事務担当

社会教育・文化財課長 中根孝司
文化財担当参事 森崎理一
埋蔵文化財調査係長 大村敬通

調査担当

社会教育・文化財課
技術職員 藤田 淳

第2次確認調査（平成元年3月23日～3月30日）

事務担当

社会教育・文化財課長 中根孝司
文化財担当参事 森崎理一
埋蔵文化財調査係長 大村敬通

調査担当

社会教育・文化財課
主査 吉田 昇
技術職員 平田博幸

全面調査（平成元年7月20日～10月13日）

埋蔵文化財調査事務所

事務担当

所長 大江 剛
副所長 才木 繁
副所長兼
調査第2課長 村上紘揚
主査 池田正男

調査担当

調査第2課
技術職員 村上賢治
同 藤田 淳
同 甲斐昭光
調査補助員 濱野俊一
同 野村泰裕
同 藤原広志
現場事務員 木口いづみ
整理作業員 辻本京子
植野邦子

2. 整理の体制

調査の結果出土した遺物については、発掘調査と並行して現場事務所で水洗い・ネーミングを実施し、接合・復元・実測・トレース・レイアウトの諸作業は平成2年度に、埋蔵文化財調査事務所において実施した。

整理の体制は次のとおりである。

平成2年度

埋蔵文化財調査事務所		整理担当	
事務担当		整理担当	
所長	内田隆義	技術職員	村上賢治
副所長	村上紹揚	同	藤田淳
総務課長	小池英隆	同	甲斐昭光
整理事務担当		嘱託職員	
整理普及課長	松下勝	同	斎藤海予子
技術職員	岸本一宏	同	本庭田英子
金属器担当	加古千恵子	同	木下佳志子
		同	井谷由美

第2章 遺跡をとりまく環境

深江北町遺跡は六甲山麓の芦屋川の右（西）岸に位置している。この地域は、早くから開発され、遺跡の多くはその市街地の下に埋もれている。しかし近年、市街地の再開発と共に、遺跡の調査が増加し、建物や道路の下に埋もれていた遺跡についての資料が年々増加している。当遺跡も同様な状況の下（県営住宅の建設に伴う）で、調査を実施した。

深江北町遺跡の周囲では、芦屋市朝日ヶ丘遺跡が最も古く、ナイフ型石器等の旧石器が出土している。

縄文時代の遺跡は当地域では少ないが、早期・前期・後期の土器がまとまって出土したまた、県教育委員会が調査した北青木遺跡と本庄町遺跡では、後期・晩期の土器が出土しており、昭和61年度に調査を実施した本庄町遺跡では、砂層を掘り込んだ貯蔵穴群（縄文中一後期）を検出している。

弥生時代に入ると、遺跡の数は増加する。近年の調査では、扇状地から沖積地にかけての遺跡が数多く知られるようになった。弥生時代前期の遺跡としては、昭和59年度に調査が行われた北青木遺跡がある。臨海平野における砂堆上に立地する遺跡で、溝・土壙・柱穴が検出されている。砂堆間の窪地に水田を営んだ可能性が指摘されており、本庄町遺跡では前期の水田跡や溝が検出されている。その他の前期の遺跡も概ね標高10m以下の部分に立地している。

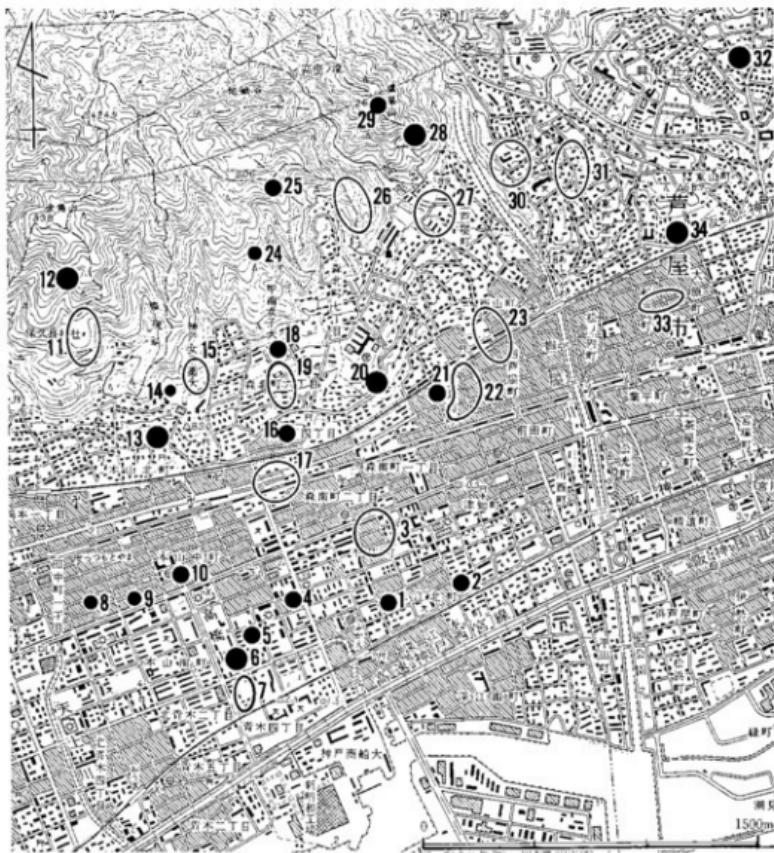
弥生時代中期に入ると遺跡の数が増加し、特に標高10m～30mにかけての扇状地から台地上にかけて立地するようになる。それと同時に、会下山遺跡や城山南麓遺跡・金鳥山遺跡のように、標高100mを越えるような場所に立地する高地性集落が出現していく。また保久良神社遺跡のような祭祀遺跡も標高150mを越える高所に立地する。一方標高10m以下に立地する遺跡では、溝や流路などの検出が多く、住居跡は認められない。

弥生時代末～古墳時代初頭になると、深江北町遺跡C2区で円形周溝墓が11基、砂堆上で検出されている。今回報告する深江北町遺跡E地区の、E3区で検出した掘立柱建物などの主な遺構もこの時期に属している。

古墳時代の集落跡としては、標高20m以上の部



深江北町遺跡説明板（C地区）



- | | | |
|------------------|----------------|------------|
| 1. 深江北町遺跡（E地区） | 13. 堀内遺跡 | 25. 森奥遺跡 |
| 2. 深江北町遺跡（A-D地区） | 14. 牛駒劍澤出土地 | 26. 会下山遺跡 |
| 3. 本庄町遺跡 | 15. 神戸女子業大構内遺跡 | 27. 山芦壁遺跡 |
| 4. 深江遺跡 | 16. 森北町遺跡 | 28. 城山南麓遺跡 |
| 5. 小路大町遺跡 | 17. 森西町遺跡 | 29. 城山遺跡 |
| 6. 本山南町遺跡 | 18. 森銅鐸出土地 | 30. 笠ヶ塚遺跡 |
| 7. 北青木遺跡 | 19. 板下山遺跡 | 31. 藤ヶ谷遺跡 |
| 8. 本山中町遺跡 | 20. 三条同山遺跡 | 32. 朝日ヶ丘遺跡 |
| 9. 本山遺跡 | 21. 西良手遺跡 | 33. 船戸遺跡 |
| 10. 井戸田遺跡 | 22. 丹生遺跡 | 34. 東山遺跡 |
| 11. 保久良神社遺跡 | 23. 芦屋廐寺 | |
| 12. 金烏山遺跡 | 24. 東山遺跡 | |

第3図 周辺の遺跡

分に立地する森北町遺跡で、中期の住居跡が検出されている。また低地では集落と水田が営まれ、深江北町遺跡C1区では、方形の竪穴住居跡（古墳時代後期）を検出しており、砂堆上に集落が存在した事がわかる。後期の水田跡は本庄町遺跡で検出されている。

古墳は、標高25m地点に立地するヘボソ塚古墳が前期古墳としては唯一のものである。前方部を西北西に向けた全長約65m、後円部径約35mの前方後円墳で、竪穴式石室を埋葬主体とし鏡6面、勾玉・管玉などの玉類、石釧、土器が出土しており、現在東京国立博物館で保存されている。中期古墳はこの地域では認められない。後期古墳は芦屋川右岸の城山南麓古墳群や三条古墳群などがある。また、近年調査された住吉宮町遺跡・坊ヶ塚遺跡は、住吉側と石屋川によって形成された扇状地に立地しているが、その土石流の厚い堆積の下から方形周溝幕や後期古墳が検出されている。これに近接して、標高21m地点から後期の帆立貝式古墳である住吉東古墳が調査された。全長24m、円丘部径18mを測る。この古墳では、墳丘に遺体を安置する喪屋の遺構が検出されている。今後も住吉宮町遺跡や坊ヶ塚遺跡・住吉東古墳のように、砂に埋もれた遺跡が見つかる可能性がある。

以上、古墳時代までの遺跡について簡単に述べてきたが、先にも述べたように、阪神間では都市再開発に伴って遺跡の調査も増加しており、遺跡の分布も更新していく必要がある。

深江北町遺跡周辺の地形環境及び地形の形成過程については高橋学氏の詳細な研究がある。兵庫県教育委員会発行の『北青木遺跡』（1986年）・『小路大町遺跡発掘調査報告書』（1987年）・『深江北町遺跡』（1988年）に掲載されている、「芦屋・住吉川流域の地形環境Ⅰ」「同Ⅱ」「同Ⅲ」に詳しく述べられており、参照していただきたい。



調査地区全景

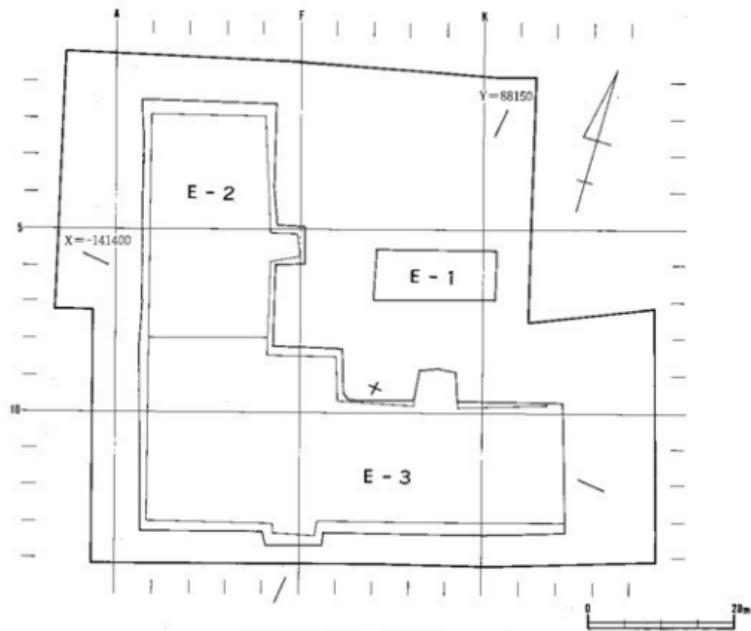
第3章 調査の成果

第1節 調査の概要（層序と遺構面）

今回、調査を実施した深江北町遺跡E地点は、海岸線に沿って東西方向に帯状に延びる砂堆の北端から後背湿地にかけて立地する。調査前の地盤は、現代の盛土により高さが均一化されていた。しかしながら、調査の結果、砂堆の上面は南側のE 3区が最も標高が高く、これより北側のE 1区、E 2区にかけて砂堆がしだいに深く埋没して後背湿地へと連なっていることが判明した。また、この後背湿地が、時代を追うごとに、埋積されていく様子が明瞭に観察された。

第5図はこうした土層の堆積状況をパネルダイアグラムによって示したものである。

最下層のV層は砂堆を形成する淘汰の良い細砂層である。南北方向では、6ラインを境にV



第4図 調査地区 地区割図

c層が深度を増していることがわかる。Vc層の上部が旧表土として土壤化したと考えられる暗褐色のVa層（クロヌナ）は、7ラインの南側に約7mの幅で遺存しているだけであるが、本来はこれより南側にも広がっていたものが、後世の耕作などにより、削平されてしまったものと考えられる。したがって、7ライン以南ではVc層上面は、ほぼ平坦で、その直上にはIIa層がある。IIa層には

弥生時代～近世の遺物が混在しており、以下の章では、これを包含層と呼ぶ。

後背湿地部を埋積するように堆積するIV層とIII層は、ともにシルト混じりの砂層であるが、その上半部は土壤化している（IVa層、IIIa層）。調査の結果、IVa層上面では畦畔が、IIIa層上面では畝状遺構が検出され、水田や畑地となっていたことが明らかとなった。特に、IIIa層上面は、粗砂層（IIC層）が凹部を埋めており、遺構の遺存状況は良好であった。しかしながら、このIIC層はE2区東半部及びE1区ではまったく存在せず、畝状遺構はE2区西端部の限られた範囲でしか検出できなかった。

E1区・E2区のIII層、E3のV層の上には、旧耕作土であるI層とII層が調査区全域に認められる。現在は市街地化している当遺跡周辺も、戦前までは水田や畑が広がっていたのである。

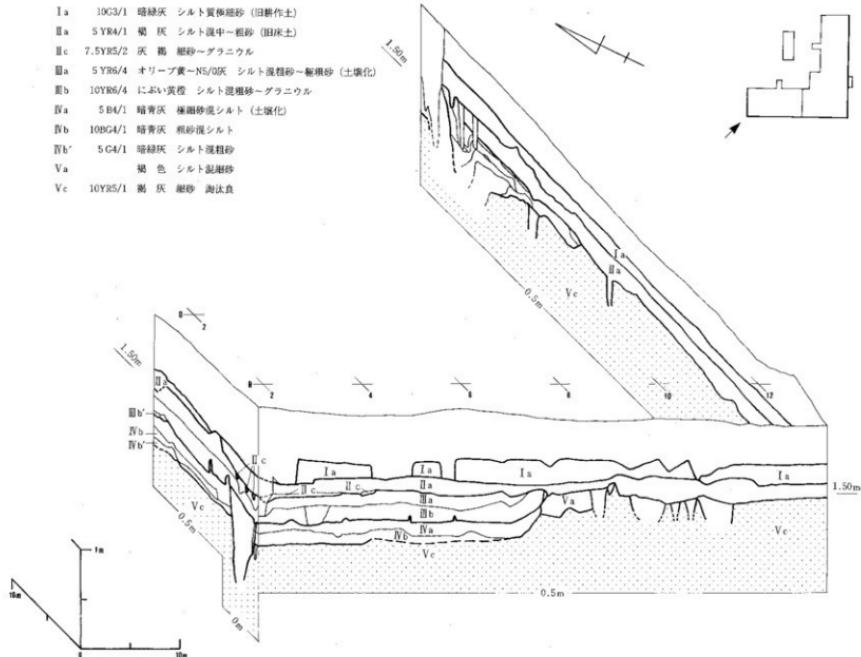
以上のような土層の堆積に対応して、今回の調査では、IIIa層、IVa層、Vc層・Va層のそれぞれの層の上面で、合わせて3面の遺構面を確認することができた。

先述のようにIIIa層の上面では、畝状遺構が検出され、IVa層上面では水田が検出された。また、砂堆上のVa層・Vc層の上面では掘立柱建物・土壙・溝・柱穴などが検出された。これらの遺構の時期は、出土遺物から、畝状遺構が近世、水田が中世、掘立柱建物・土壙・溝・柱穴には、弥生時代～古墳時代、中世、近世のものが混在すると考えられる。



調査風景

- I a 10G3/1 暗緑灰 シルト質堆積砂（旧耕作土）
 II a 5YR4/1 黄灰 シルト混中～粗砂（田床土）
 II c 7.5YS5/2 灰褐 塵砂～グラニウム
 III a 5YR6/4 オリーブ黄～NS/0灰 シルト混粗砂～粗堆積（土壤化）
 III b 10YR5/4 に赤い斑点 シルト混堆積～グラニウム
 IV a 5Ba/1 暗青灰 塵砂混シルト（土壤化）
 IV b 10BG4/1 暗青灰 粗砂混シルト
 V b' 5G4/1 暗緑灰 シルト混粗砂
 V a 黄色 シルト混細砂
 V c 10YR5/1 黄灰 塵砂 混汰食



第5図 パネルダイヤグラム

第2節 弥生・古墳時代の遺構

E 1・3区は、東西にのびる砂堆の北端部分にあたり、掘立柱建物、土壙、溝、柱穴などの遺構が確認された。このうち、中世以外の遺構を第6図に示すこととする。

遺物の出土により、時期の決定できる遺構を示せば以下のようなになる。

弥生時代 …… 掘立柱建物 1、土壙 2、土壙 5、土壙 6、土壙 7、土壙 8

古墳時代 …… 溝 2、柱穴 1

これに対し、遺物の伴わない遺構については、時期を確定することが困難なため、これらについて、必要に応じて本節において記述の対象とする。

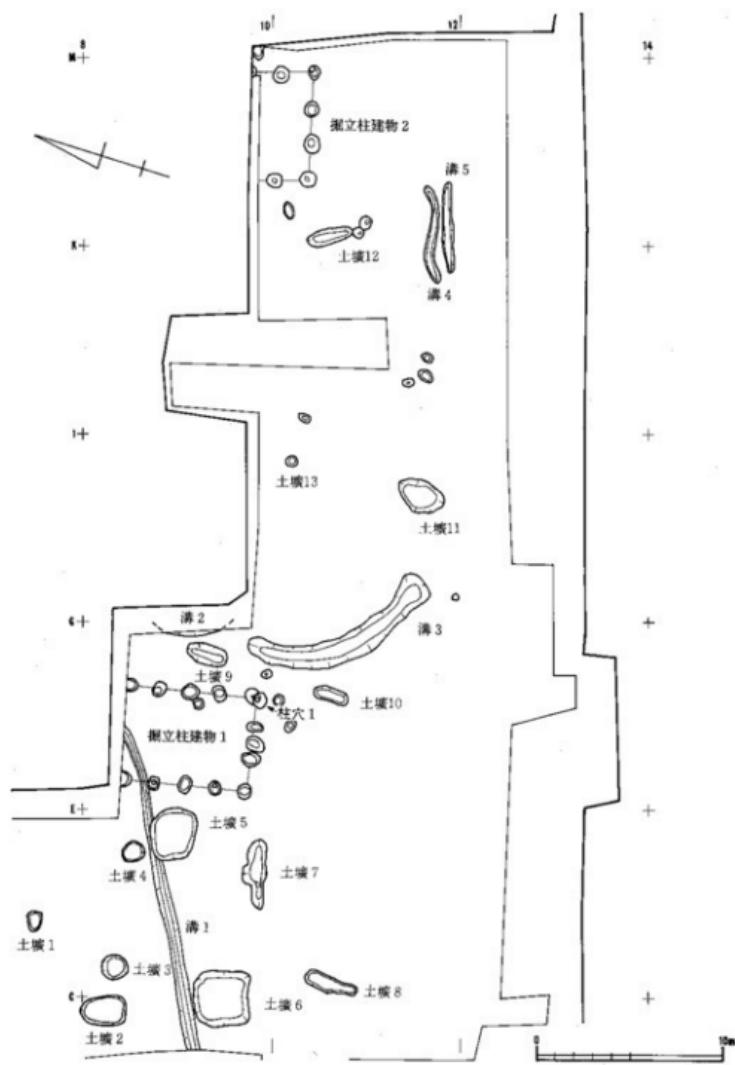
遺構の多くは、旧地表の削平されたVc層上面で検出された。旧地表は、植物起源の有機物が集積し、土壤化が進んだ黒色を呈するもので、クロスナと称される。このクロスナは、E 3区溝1以北の砂堆縁辺部に僅かに残存するのみであり、これ以外の比較的高い部分は、畠地等として利用されていた。遺構、遺物の分布が北に偏ることは、この後世の削平の結果であろう。

土壙 7・8は、以下で別個に記述しているが、この2つが直交する位置にあること、共に完形に近い弥生中期の土器を埋土に含むことから、方形周溝墓の周溝の可能性が考えられる。

なお、地山が崩壊しやすい砂層であり、削平を受けているものがあることから、以下に記す遺構の形状や規模は本来のものと大きく異なる可能性があることを注意しておきたい。



E 3区西半部の遺構



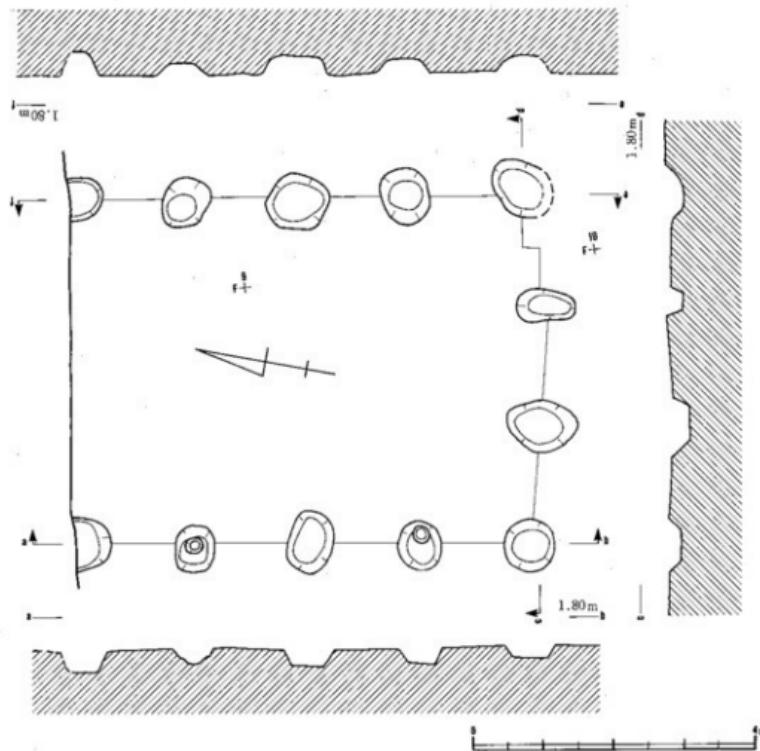
第6図 弥生・古墳時代の遺構

掘立柱建物 1

E 3 区西方のVc層上面で検出された。棟軸方向は磁北から約10度西に振っている。建物は調査区外の北方に延びるため、梁行は3間（5.0 m）、桁行は4間以上（6.5 m以上）の規模を示す。

柱間の寸法は、梁行が1.5～1.6 mであり、桁行は1.6～1.7 mとこれよりもやや長くなっている。柱の堤方は、直径50～70cm、深さ20～30cmであり、柱痕はいずれの柱穴においても確認できず、西桁列の2か所で柱の抜き痕かと思われる痕跡を確認したのみである。この抜き痕の直径は約20cmである。

南東隅の柱堀方内から壺、甕が出土している。



第7図 掘立柱建物 1

掘立柱建物 2

E 3 区東端の、Vc 層上面で検出された掘立柱建物である。検出面の標高は、掘立柱建物 1 と同じく約 1.4 m である。棟軸の方位は、磁北から約 14 度西に振っており、掘立柱建物 1 とはほぼ同じ方向を示す。

建物の北半は調査区外に延びるため、桁行の規模は 2 間までしか確認できなかった。梁行の規模は 3 間（約 5.7 m）である。

柱間の寸法は、桁行が 1.55、1.60、1.65 m であり、梁行は東から順に 2.00、1.75、1.90 m とこれよりもやや広くなっている。

柱掘方の直径は 70~80 cm、深さ 20~30 cm を測る。柱痕跡は確認できなかった。

遺物は出土していないが、規模や方位の類似から掘立柱建物 1 に近い時期を考えたい。

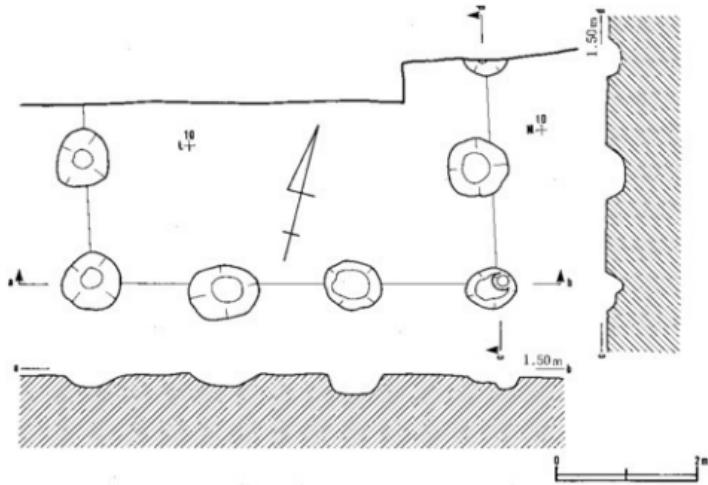
土壤 1

E 3 区の西北で検出された椭円形の土壤である。

検出面における規模は、長軸の長さが 1.05 m、短軸の長さが東端で 68 cm、西端で 45 cm を測る。断面形は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは 12 cm である。

壌底は平坦であり、壌底における規模は、長軸の長さが 85 cm、短軸の長さが東端で 50 cm、西端で 30 cm を測る。

遺物は出土していないが、他の土壤との埋土の類似から弥生時代終末頃のものと思われる。



第 8 図 掘立柱建物 2

土壤2

E 3 区西北隅のクロスナ上面 (V a 層上面) で検出された土壤である。

平面形は隅丸の長方形であり、検出面における規模は、長軸の長さ2.35m、短軸の長さ1.55mを測る。

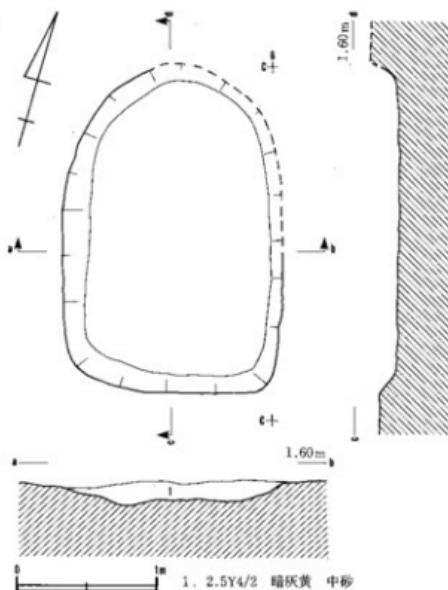
検出面の標高は1.45mであり、これから壙底までの深さは12cmである。

断面形は浅い皿状を呈し、壙底は比較的平坦である。

壙底における規模を示せば、長軸の長さが2.10m、短軸の長さが1.30mとなる。

埋土には、比較的荒い砂が認められた。

埋土からの遺物には、甕、鉢等の弥生土器があり、いずれも埋土上層から出土したものである。



第9図 土壙2

土壤5

E 3 区西半のV c 層上面で検出された。

平面形は不定形であり、検出面における規模は長軸の長さ2.70m、短軸の長さは東端で2.30m、西端で1.70mを測る。

検出面の標高は1.42mであり、壙底までの深さは20cmである。断面形は浅い皿状を呈する。

壙底の規模は、長軸の長さが2.15m、短軸の長さは東端で1.90m、西端で1.30mを測る。

埋土には比較的荒い砂が認められ、鉢等の弥生土器の細片が出土した。

土壤6

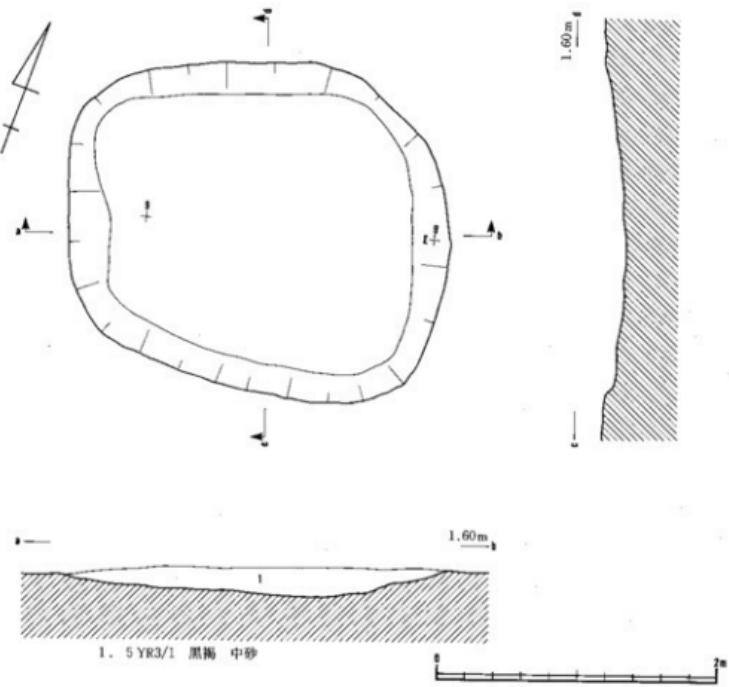
E 3 区西端のV c 層上面で検出された。

平面形は隅丸の正方形であり、検出面における規模は、東西2.90m、南北2.90m、壙底における規模は、東西2.10m、南北2.30mを測る。

検出面の標高は1.45mであり、これから壙底までの深さは約18cmである。

断面形は浅い皿状を呈する。

埋土からは比較的大形の土器の破片が多く出土している。



第10図 土壌 5

土壤7

E 3区西半のVc層上面で検出された、長軸の方向が東西を示す溝状の土壙である。

検出面における規模は、長軸が3.75m、短軸が東端で0.95m、西端で0.60mを測る。

検出面の標高は1.44mで、壙底までの深さは20cmである。壙底の規模は、長軸が2.95m、短軸が東端で0.40m、西端で0.20mを測る。西寄りの壙底に接して、完形の壺が出土した。

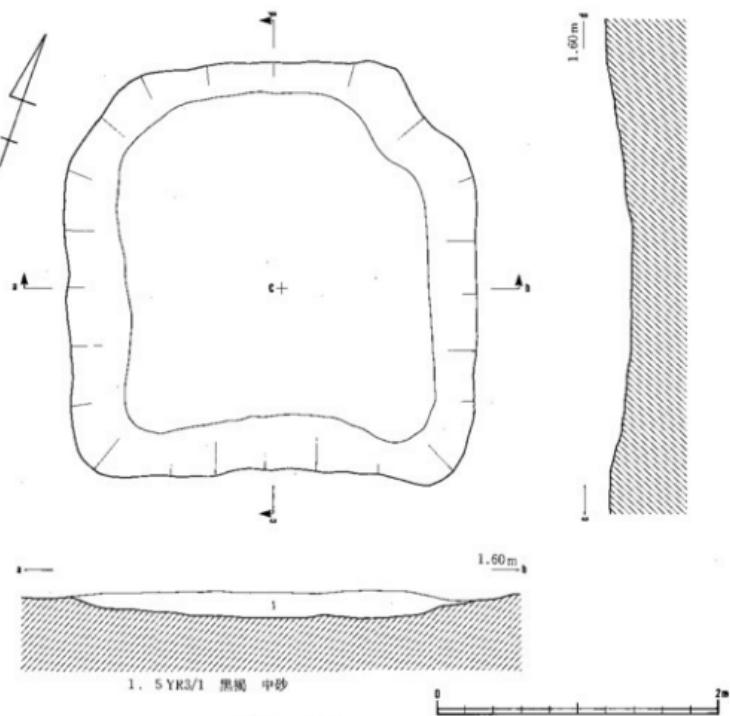
土壤8

E 3区西半のVc層上面で検出された、長軸方向が南北を示す溝状の土壙である。

検出面における規模は、長軸が3.75m、短軸が北端で0.80m、南端で0.60mを測る。

検出面の標高は1.30mであり、壙底までの深さは12cmである。壙底の規模は、長軸が2.60m、短軸が北端で0.60m、南端で0.50mを測る。

壙底は比較的平坦で、これに接する形で土器2個体が南北両端で検出された。



第11図 土壌 6

溝1

E 3 区の西北で検出された直線的に延びる溝である。Vc層上面で検出された。土壌5に一部を切られている。深さは9~11cmを測り、西方ほど深くなっている。断面形は台形を呈する。方位は、磁北から約60度東に振っている。

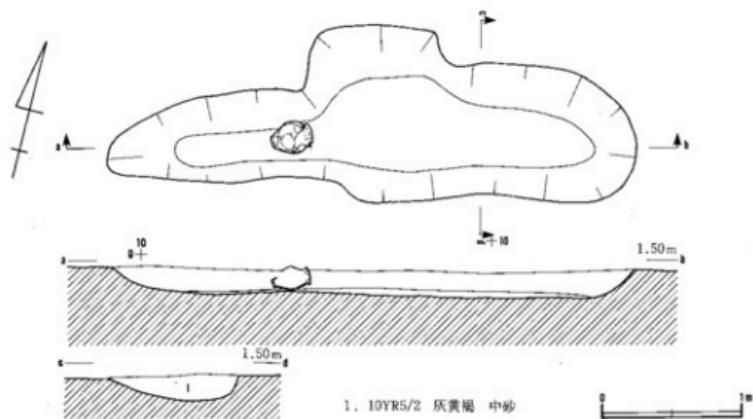
溝2

掘立柱建物1の東側の壁際で検出された南北方向の溝である。

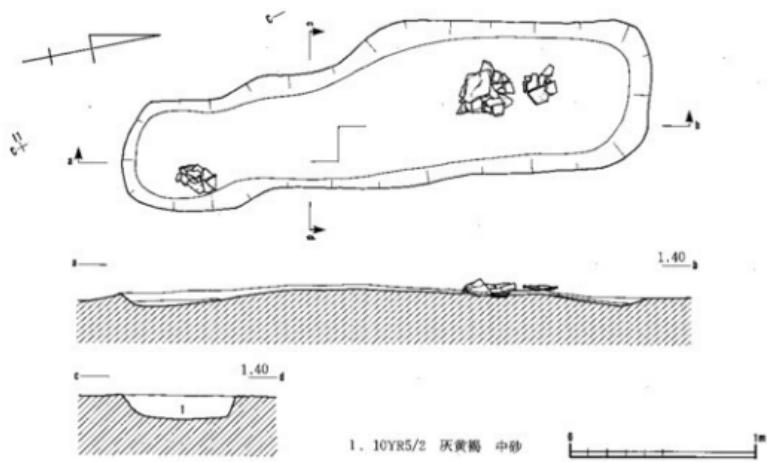
多くは調査区外に延びるため、詳細は不明である。深さは10cm以上である。

柱穴1

掘立柱建物1の南東柱を一部切る形で検出された。58×80cmの長円形を呈する。深さ30cmを測る。柱痕は確認できなかった。埋土上層より須恵器が1点出土している。



第12図 土填 7



第13図 土填 8

第3節 中世の遺構

中世の遺構は、E 1区～E 3区のすべてにわたって認められるが、砂堆上にあたるE 3区では、掘立柱建物（掘立柱建物3）、土壤（土壤13・15）が、後背湿地にあたるE 1区・E 2区では、水田と土壤（土壤14）が検出されている。

第1・2節で既述のように、E 3区の遺構は、旧表土（V a層）が削平されたV c層上面で確認された。また、E 1区・E 2区の遺構はIV a層上面で検出された。

掘立柱建物3

E 3区西方の掘立柱建物1（弥生時代）とほぼ重なった位置で検出された。棟軸の方向は磁北から約10度西に振っている。

建物は調査区外の北方に延び、東方には溝3、土壤9、後世の攪乱などが存在するため、規模は明らかでない。したがって、桁行は2間（4.8m）以上、梁行は3間（7.6m）以上となるが、「L」字状の構造である可能性も否定できない。

柱間の寸法は、梁行が2.2～2.5mであり、桁行は2.4～2.6mとこれよりやや長くなっている。弥生時代の掘立柱建物に比べ、柱間が広くなっていることがうかがえよう。柱の掘方は、直径50～60cm、深さ20～40cmである。柱痕は北西端の1つで確認されたが、これ以外では、確認できなかった。

出土遺物は土師器の小片が1点出土しているのみである。

土壤13

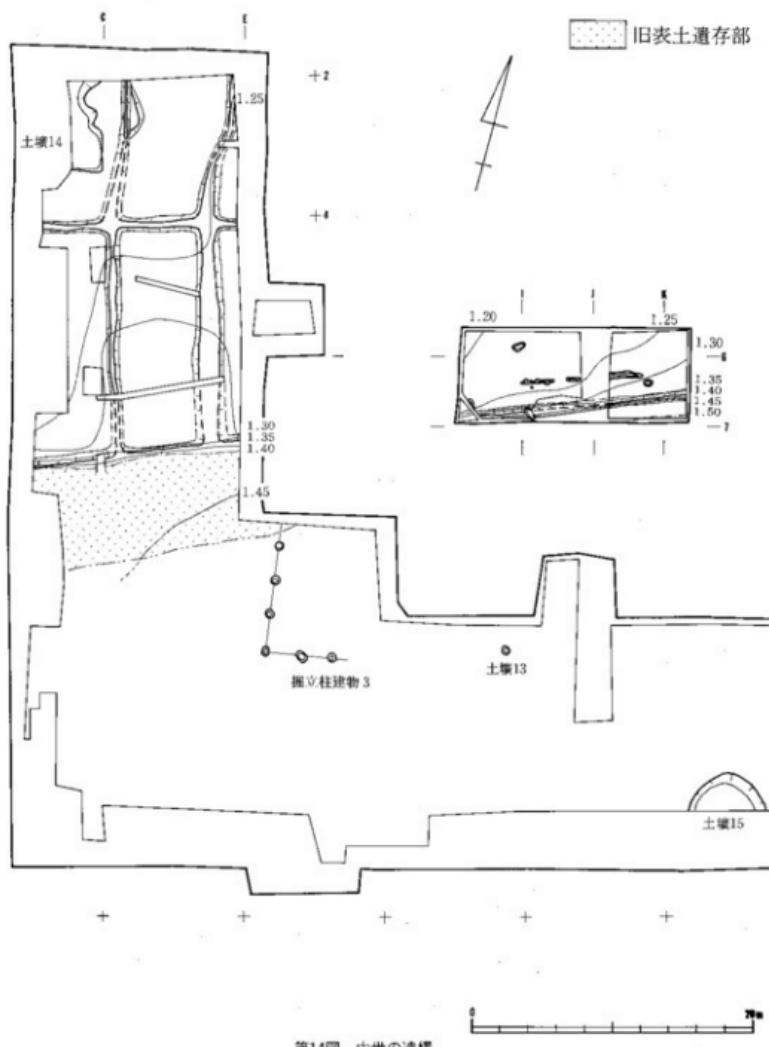
E 3区中央北端付近で検出された楕円形の土壤である。第2節で述べられた土壤1～8とはほぼ同様の規模をもち、埋土の特徴も類似している。灰釉陶器片（34）が出土している。

土壤14

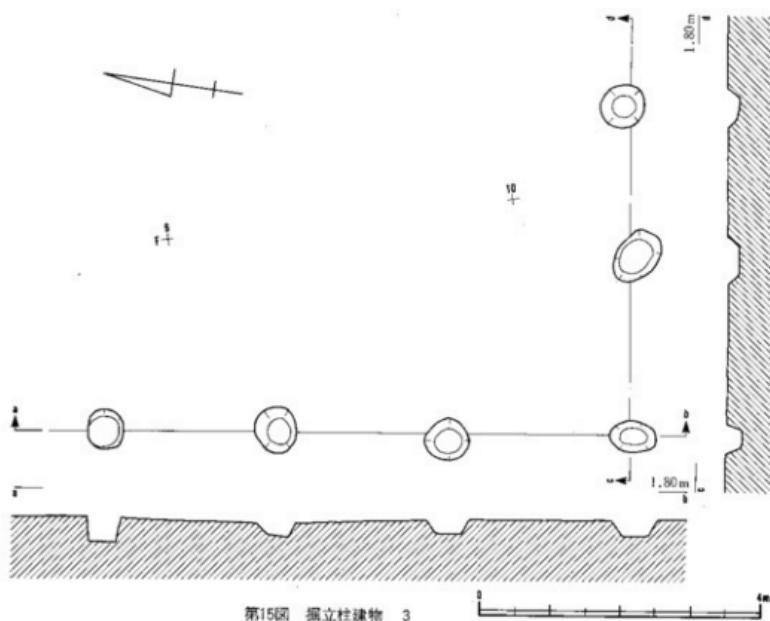
E 2区北西端で検出された不整形な土壤である。水田面から掘り込まれており、水田に伴うものではない。北側は調査区外に延びている。西側は攪乱を受けているが、調査区西壁には土壤の掘り込みが認められず、調査区内に收まるものである。規模は東西1.9m（調査区北壁）南北3.8m以上となる。断面は調査区北壁では深さ0.5m以上をはかり、最下部の埋土にはシルトと砂の互層がみられる。



土壤14断面



第14図 中世の遺構



第15図 独立柱建物 3

底部付近では湧水が著しい。

遺物は1層から縁釉陶器(35)と瓦質土器の土釜(36)が出土している。

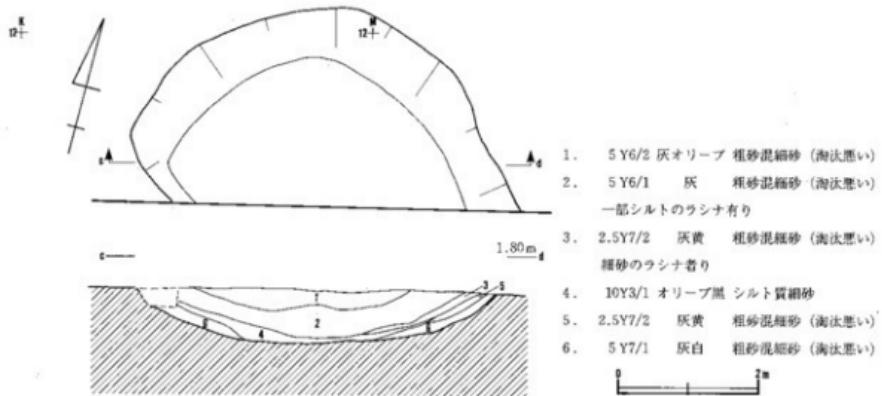
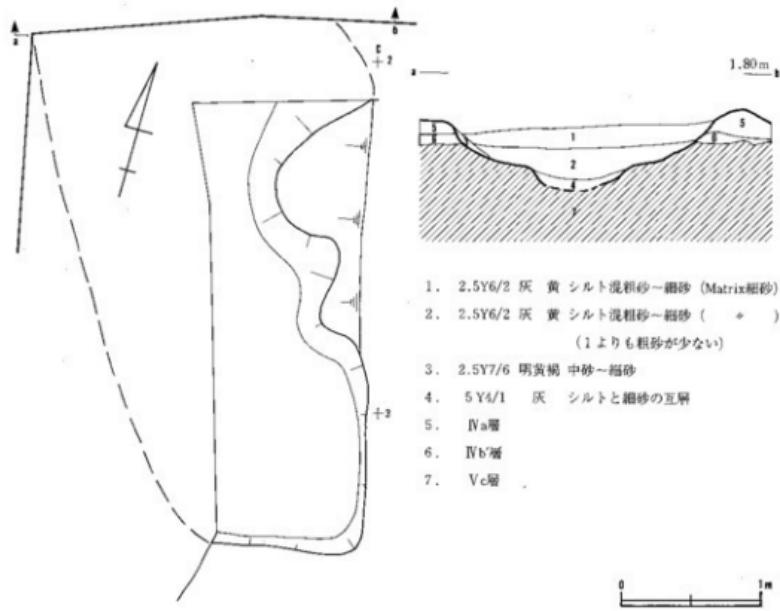
土壤15

E 3区東南端で検出された。南側は調査区外に延びているため全体の形状は不明である。

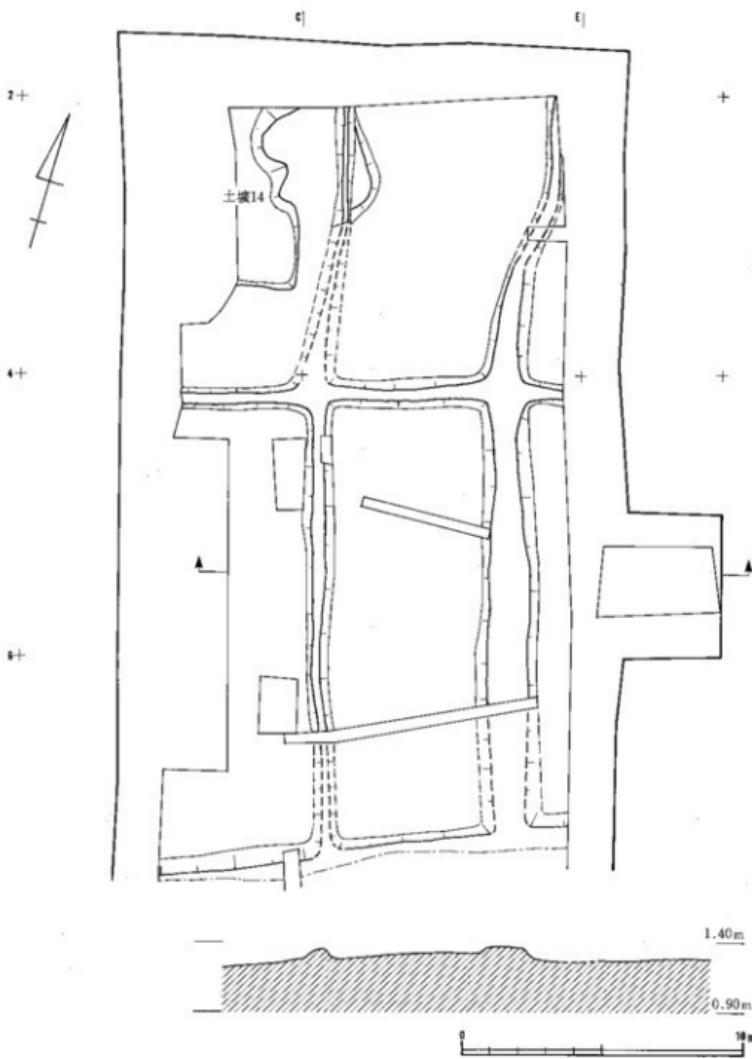
規模は東西5m(調査区南壁)南北2.8m以上を測る。断面は皿状を呈し深さは0.7mであるが、調査区南壁ではさらに深く1.2m以上を測る。埋土は粗砂～細砂を主体とし、底部付近では湧水が著しい。

水田

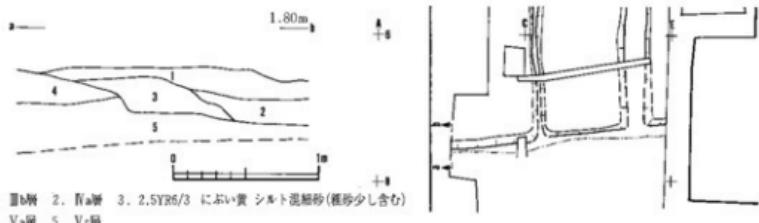
E 1区・E 2区で検出された。砂堆の微高地部との境に東西方に直線的にのびる畦畔があり、これよりも北側が水田域である。畦畔は南北方向のものと東西方向のものがあり、畦畔の幅は約2.1m～0.8mで水田面との比高差は5～10cmである。微高地部との境の畦畔は、水田側の斜面にシルト質の強い土で盛土がされており(第18図3)、畦畔の崩壊を防止するためのものであったと考えられる。調査範囲が限られているが、各水田は南北方向に細長く、整然と



第16図 土壌14(上)・土壌15(下)



第17図 E 2区 水田造構



第18図 水田遺構 南西端の土層

配列されていたものと想定される。

水田の1筆全体が検出されたものはE2区中央部の1筆のみで、東西5.5m、南北15mの長方形を呈する。他の水田も、畦畔の状況からこれとはほぼ同様の規模、形態をもつと想定されるが、E1区では、Ⅲ層とⅣ層の識別が難しかったことから、東西方向の畦畔以外検出されておらず、形態は不明である。

この水田の時期はⅣa層出土の遺物のうち最も新しいと考えられるもの（第27図40）が15世紀代のものであることから、少なくともこれ以降の時期が想定される。

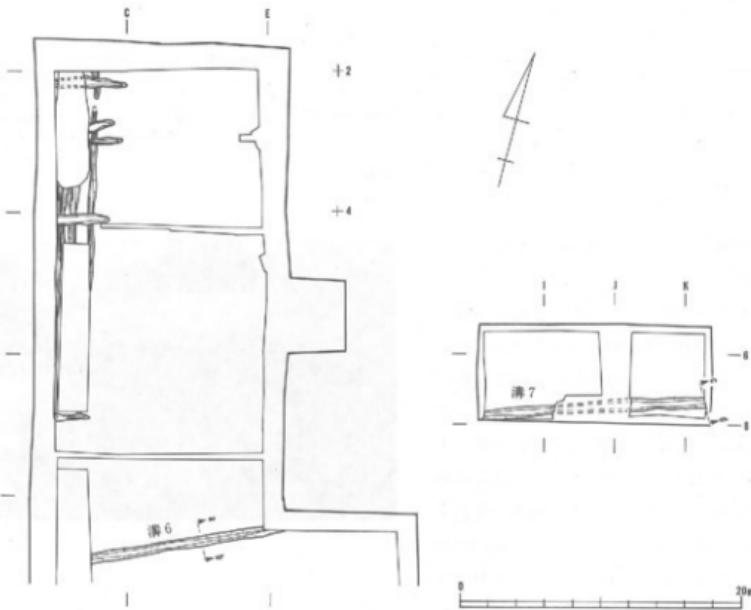
第4節 近世の遺構

近世の遺構はE1区とE2区の西端及びE3区北端でのみ検出し、その他の調査地区では全く認められなかった。遺構としては、畝状遺構（畝跡）と溝がある。

畝状遺構（畝跡）

E2区の西端で検出した遺構で、現在の表土・盛土を重機で除去した直下で検出した。南北方向及び東西方向の畝を検出している。ただ、第2次確認調査の際に設定したトレンチが、遺構のある部分の中央に設定されていたため、検出できたのはごく一部である。畝の上面は削平されているため、検出したのは畝間の溝である。Ⅲa層をベースとし、この層を切り込んでⅡc層が堆積していた。従って検出は比較的容易であった。

南北の溝は、4本を検出した。幅25cm～50cmを測り、溝相互の間隔は最大90cmを測る。検出した溝はほぼ並行して南北に走るが、西端の2本については切り合いが見られる。東西の溝は、5本を検出しているが、E2区北西端に集中しており、その他はE3区との境付近で一本を検出したに止まる。幅50cm～80cmを測り、南北方向の溝よりも深い。長さは最長13mを検出した。C4付近で南北の溝と交差しており、その部分の切り合いを見ると東西の溝の方が新しいもの



第19図 近世の造構

である。

遺物は、歛部分を掘削している際に唐津焼きの椀（第30図105）を出土している。

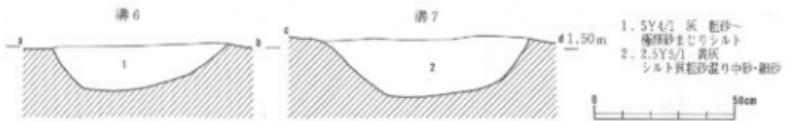
地形的には下層の水田でもそうであったが、南東から北西に向けて緩やかに傾斜しているため、低い北西部が削平を免れたものであろう。

溝6

E 3 区北端で検出した溝である。E 3 区の溝は、幅60cm深さ15cmを測り、方位は磁北から約60度東に振っており、東から西へ流れている。この溝は、水田面の遺存していない部分で検出されたため、



歛状造構遺物出土状況



第20図 溝6・7断面

水田跡との先後関係は不明である。

溝7

E 1区で検出した溝で、幅70cm深さ20cmを測り、水田畔を切り込んで作られている。方位は磁北から約72度東に振っており、東から西へ流れている。

溝6と溝7とは、幅や断面の形状・方位がほぼ同じで、同一のものである可能性が強いと思われる。ただ両者を延長すると食い違いを見せており、直線的には結ばれないようである。E 1区とE 2区のあいだを南北に走る溝を想定し、それに注ぎ込むという状況も考えられなくはないが、E 3区では南北方向の溝は検出していない。



溝6 断面

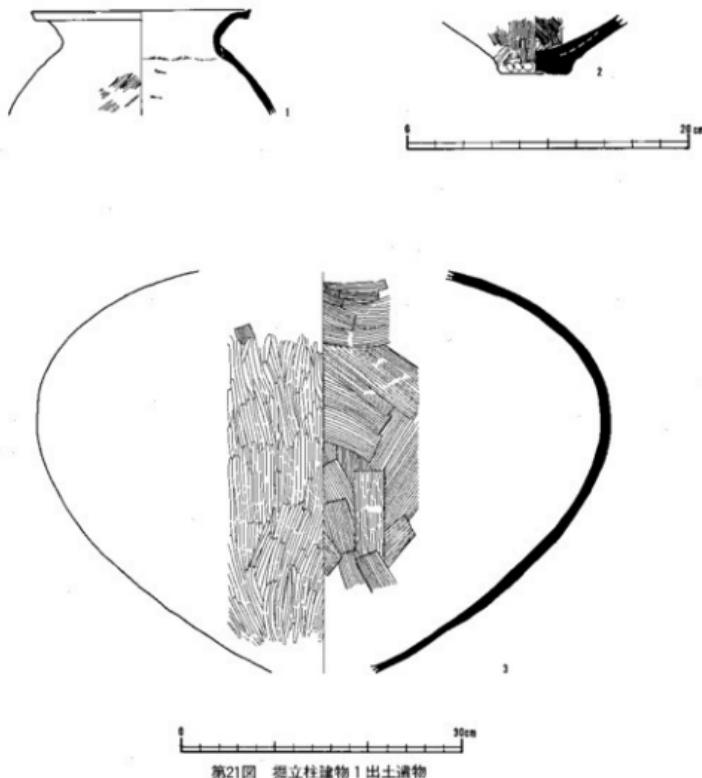
第5節 出土遺物

1. 弥生時代の遺物

今回の調査で出土した弥生土器は、中期後半と後期後半の2時期に大別でき、E3区西半部の遺構内埋土、包含層からのものが多数を占める。

量的に多く出土したのは土壙6からの一群であり、他の遺構からは数点ずつの出土である。

土壙7・8は直交し、ともに中期後半の完形に近い土器を包含する点から、方形周溝墓内の供獻土器の可能性がある。



第21図 捜立柱建物1出土遺物

掘立柱建物 1

南東隅の柱穴堀方から出土したもので、壺、壺がある。後期後半から終末にかけての時期を示すものと思われる。

1は壺の肩部以上の破片である。外反する口縁部の端を、強いヨコナデによって上方につまみ上げている。体部外面の調整には、右上がりのタタキのち、斜め方向のナデを施す。体部内面には、口縁部との境付近まで、逆時計回りのヘラケズリが認められる。口縁部直径は15.4cmを測る。

2は壺の底部である。底はドーナツ状を呈する上げ底である。外面の調整は右上がりのタタキのち、縱方向のハケを施す。内面にはハケメが認められる。底部直径は4.8cmである。

3は大形の壺である。口縁部以上と底部を欠失する。扁球形の体部外面には、斜め方向のハケのち、細かい縱方向のヘラミガキが施される。肩部以上は磨滅が激しいためハケメの上にヘラミガキが存在したかどうかは明らかではない。底部付近には板状工具によるスリナデが観察できる。体部内面には、下半に縱方向、中程に斜め方向、肩部近くに横方向のハケメが認められる。残存器高は42.4cm、体部最大径は60.4cmである。

土壤 1

6は底部を引き出すことによって上げ底状を呈する壺の破片である。器表の磨滅が激しいため、調整は外面のユビオサエ以外には観察できない。底部外面には粘土を継ぎ足した痕跡が認められる。底部直径は5.0cmである。

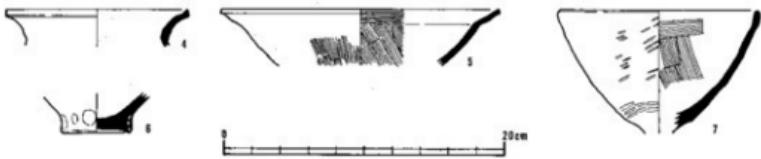
土壤 2

4は壺の口縁部である。内外面はヨコナデ仕上げであり、口縁部端を上方につまみ上げている。外面には煤が付着している。口縁部の直径は12.8cmである。

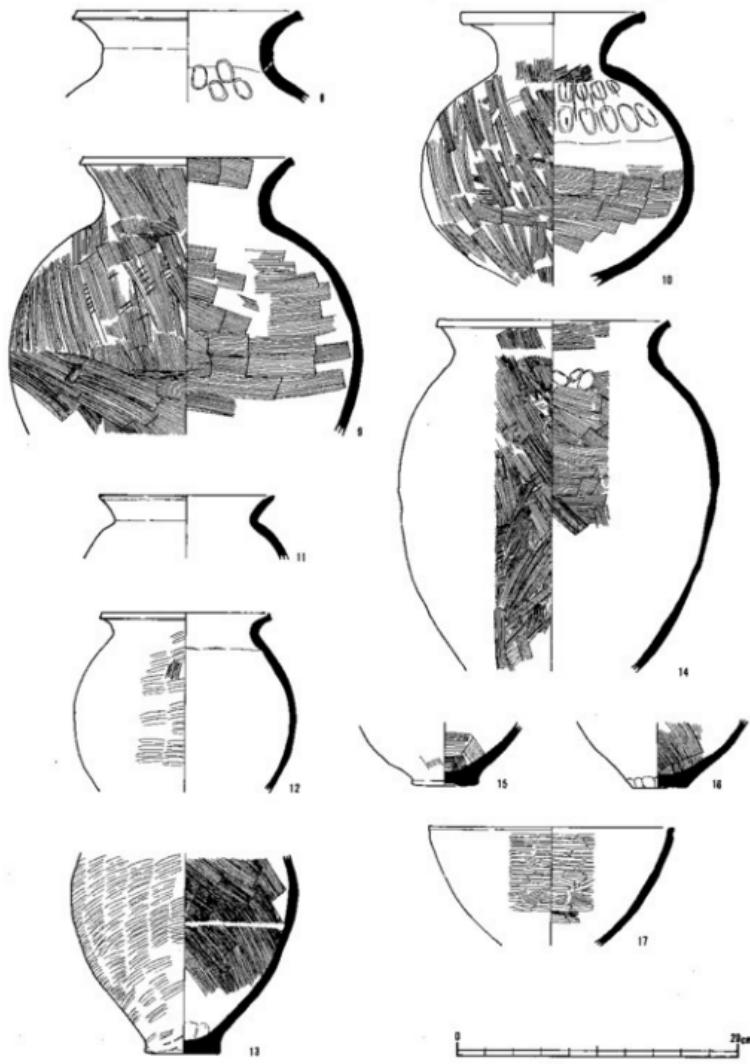
5は鉢の体部上半以上の破片である。外傾する体部に、さらに強く外傾し、端面をもつ口縁部がつく。外面の調整は縱方向のハケメ、内面は口縁部に横方向のハケ、体部に斜め方向のハケを施す。口縁部直径は19.6cmを測る。

土壤 5

7は小片で、歪みがあるため器形、法量の誤差が大きい。外面には右上がりのタタキ、内面には下半に縱方向、口縁部付近に横方向のハケメが観察できる。口縁部直径は14.0cmである。



第22図 土壌 1・2・5 出土遺物



第23図 土壌 6 出土遺物

土壤6

出土した器種は壺（8～10）、甕（11～16）、鉢（17）である。

8は直立する短い頸部に外反する口縁部をもつ広口の甕である。口縁端部はやや肥厚する。外面の調整は不明である。肩部内面にはユビオサエ、口頸部にはヨコナデが認められる。口縁部直径は15.6cmである。

9は球形の体部に外反する口縁部をもつ壺である。口縁部に端面をもつ。外面の調整は、右上がりのタタキのうち、体部中央を横方向、それ以上を斜め方向のハケで仕上げる。内面には体部と口縁部に横方向のハケメを施す。体部最大径は24.2cm、口縁部直径は14.6cmを測る。

10は球形の体部に、直立する頸部と外反する口縁部をもつ壺である。体部外面には、横方向のハケを施したのち、縱方向のハケで仕上げる。口頸部には内外面ともヨコナデがみられる。体部内面には、下半に横方向のハケを施す。肩部内面には絞り目がみられ、ユビオサエのうち器形の整形を行ったことが知られる。そののち体部と口縁部との接合部付近に横方向のハケメを施している。口縁部の直径は13.0cm、体部最大径は19.1cmである。

11は甕の破片である。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。口縁部径は12.6cmを測る。

12は倒卵形の体部に短く外反する口縁部をもつV様式系の甕である。口縁端部はやや肥厚し、端面を形成する。体部には水平あるいはやや右上がりのタタキを施したのち、縱方向のハケで仕上げる。内面は、体部、口縁部とも横方向のナデ仕上げである。口縁部の直径は11.8cm、体部最大径は15.6cmである。

13は体部上半に最大径をもつV様式系の甕である。外面は右上がりのタタキを施すが、底から7cm付近を境にタタキ主軸の方向が異なり、上部には連続タタキを意識したことがうかがえる。内面は、底部付近をナデ、それ以上を斜め方向のハケで仕上げている。底はなでており、模痕が確認できる。体部最大径は16.0cm、底部直径は5.4cmを測る。

14は体部上半に最大径をもつ甕である。外面は、右上がりのタタキのうち斜め方向のハケで仕上げている。内面は横方向のハケを施したあと、下半をなでている。口縁部の直径は20.3cm、体部最大径は22.9cmである。

15は外面にはハケメ、内面にはクモの巣状のハケメが認められる。底径は4.4cmである。

16は内面をハケで仕上げる。底には葉脈の圧痕が残る。底部直径は2.4cmを測る。

17は体部が内湾する鉢である。底部を欠失する。体部には横方向のハケを施したのち、下半をナデ、上半を横方向の細かいヘラミガキで仕上げている。内面は横方向のハケのうち、横方向の細かいヘラミガキを行う。口縁部径は17.2cmである。

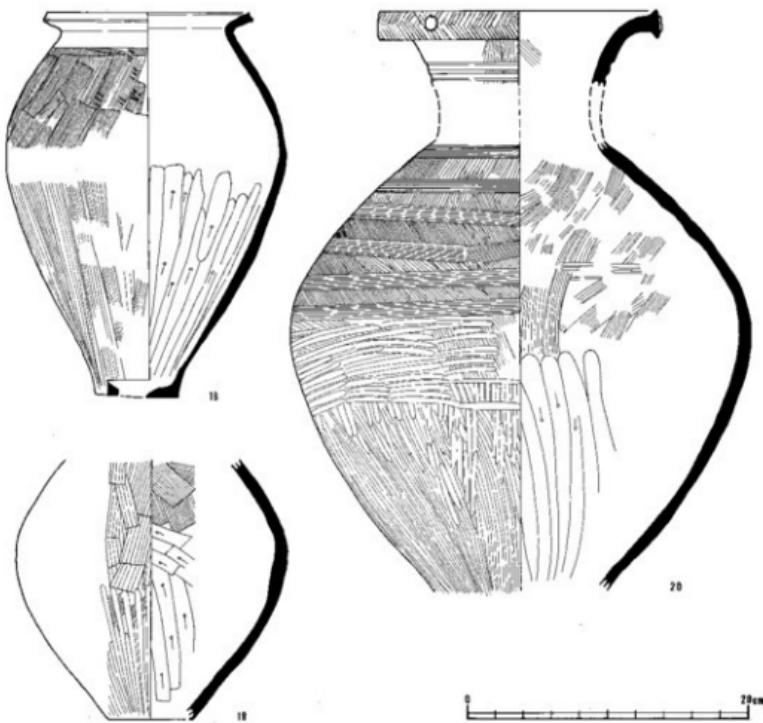
壺は、後期後半に増加するという広口壺のみであり、体部は球形化している。甕もすべてV様式系のものであり、連続ラセンタタキを意識したもの（13）があることから、後期でも新しい傾向がうかがえる。全体として弥生時代後期後半の所産と考えてよいであろう。

土壤7

18は上半に最大径をもつ丈高な体部に短く外傾する口縁部をもつ壺である。口縁端部には面を形成し、つまみ上げがみられる。底には焼成後に穿たれた円孔がある。外面は右下がりのタタキののち縦方向のハケで仕上げる。内面下半は縦方向のヘラケズリを行い、上半はナデ仕上げである。口縁部には外面のハケを切る形でヨコナデが行われる。口縁部の直径は14.4cm、体部最大径は20.0cm、底径は6.0cm、器高は27.2cmを測る。中期後半に属すると思われる。

土壤8

19は長胴の壺の体部である。外面は斜め方向のハケののち、上半を縦方向のハケ、下半を縦方向のヘラミガキで仕上げている。内面は、下半に縦および斜め方向のヘラケズリを行ったあと、上半をハケで仕上げている。体部最大径は19.2cm、底部径は6.0cmを測る。



第24図 土壙7・8 出土遺物

20は中位の強く張る体部に外反する口縁部をもつ壺である。体部の調整は、外面に斜め方向のハケを施したのち、下半に縱方向、中位に横方向のヘラミガキを行う。内面は下半をヘラケズリ、上半を斜め方向のハケで仕上げる。頸部内外面にはハケメが観察できる。体部上半の文様は、13本単位の櫛描直線文が6本巡っている。口縁部端面には板状工具の小口による刺突文が綾糸状に施された後、円形浮文が6か所に配されている。頸部には凹線が2本以上巡る。

19・20はともに中期後半の様相を示すものである。

包含層

II層から他の時代の遺物に混じって弥生時代の土器も出土している。

中期のもの（21～24）と後期以降のもの（25～30）に大別できる。

21は壺の頸部である。外面は縱方向のハケメ、内面はヨコナデ仕上げである。外面には凹線の直下に櫛描直線文が巡る。

22は外面に縱方向のハケを施し、内面をなでて仕上げる壺である。底部径は6.3cmを測る。

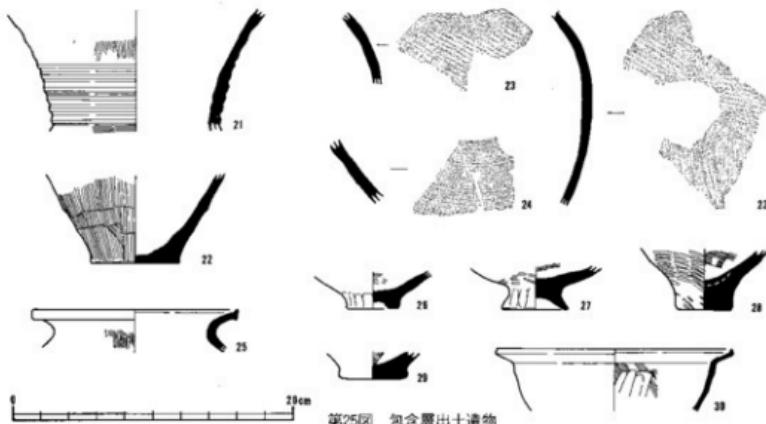
23は壺の体部の破片である。外面には右下がりのタタキののち、下半に縱方向の板ナデを施し、上半にはなでたあと7本単位の櫛描波状文が施文されている。内面はハケ仕上げである。

24は壺の肩部の破片である。9本単位の櫛描直線文が4本以上巡る。

25は壺の口縁部である。口縁部には端面をもち、上方につまみ上げられている。外面の調整は縦方向のハケである。口縁部の直径は14.4cmである。

26はドーナツ状を呈する底部であり、内面はハケ仕上げである。底部径は3.1cmである。

27は台付きの鉢であろう。体部外面には横方向のタタキののちナデが加えられている。内面



第25図 包含層出土遺物

にはハケメが観察される。底部の直径は4.6cmを測る。

28は強く突出する底部をもつ甕である。外面には右下がりのタタキが施される。内面はハケ仕上げである。底部の直径は4.0cmである。

29は内面にハケメが観察できる。底部直径は5.0cmである。

30は外傾する口縁部をもつ鉢である。口縁部端は上方につまみ上げられている。体部外面の調整は不明である。内面は斜め方向のハケののちナデを加えている。口縁部の直径は16.4cmを測る。

21~24はいずれも中期後半の所産として大過ないであろう。時期の細分は困難である。25~30も時期の決定には困難を伴うが、後期の範疇に含まれるものである。

2. 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物は他の時期に比べて極めて少ない。

柱穴1

31は須恵器の坏である。底部を欠失する。受部が内側に巻き込んでおり、たちあがりも低いものである。口縁部の直径は10.4cmである。7世紀前半の時期を示すものである。

溝2

32は土師器の坏である。小片であるため詳細は不明である。坏部外面にはナデを施したあと横方向のヘラミガキを加えている。内面には正放射状暗文がつく。暗文の形態から7世紀の所産と考えておく。

包含層

33は円筒埴輪の小片である。筒部の直径は27.0cm、タガの高さは0.6cmを測り、断面形は台形を呈する。外面の調整は、タガをつける以前の第1次調整のタテハケが認められるのみで、タガの張りつけ以降になされる第2次調整はみられない。5世紀末から6世紀前半の時期が与えられよう。

調査区の北方山麓に位置する芦屋川流域の三条岡山遺跡等において、包含層から同時期の円筒埴輪が出土している。また、住吉川流域でもJR住吉駅周辺で地下に埋没した古墳群が検出されつつある。当調査区付近にも埋没した古墳の存在が想定されることを指摘しておきたい。



第26図 古墳時代の遺物

3. 中世の遺物（第27・28図）

中世の遺物は、主に、IV層とIII層から出土しており、柱穴や土壙などの遺構から出土したものはごくわずかに過ぎない。出土状況を見ても、遺棄もしくは廃棄されたと考えられるものは皆無で、ほとんどが、洪水などによって調査区外から運ばれてきたと考えられるものである。また、これらの遺物の中には中世以前のものが若干含まれ、中世の中でも時期幅が認められることから、明確に各遺構の時期を決定できるものではない。したがって、ここでは概略を述べるにとどめておきたい。なお、ここで扱う遺物のうち、土鍤については、近世の遺物が多いI層・II層からも出土しており、中世以降に帰属するものが多く含まれると考えられることをことわっておきたい。

今回の調査で出土した遺物は、土器では須恵器・土師器・瓦質土器・綠釉陶器・灰釉陶器・陶器・青磁・白磁があり、土製品では面子と土鍤がある。この内、遺構から出土したもので図化可能であったものは、3点（34～36）である。土器のうち出土層位が明らかなものは、37・38・41・42・44・47・52・48・49・50（III層）と40・45・51（IV層）である。

須恵器には坏（45・46）、坏蓋（44）、捏鉢（47・50）がみられるが、坏は体部と底部の境に高台を付すものある。捏鉢は、口縁部が直線的に延び、端部は上下に拡張させている。

土師器には小皿（37・38）、土鍋（40・41）、土釜（42）、脚（43）がある。小皿は口径の小さなものの（37）と大きなものの（38）がある。土鍋は口縁部直下に突堤状の凸部を有するものである。土釜は最大径が胴部中程にあり、鍔の退化が認められるものである。

瓦質土器は土釜がみられる（36・39）。36は内傾する短い口縁部の直下に断面方形の小さな鍔を付す。口縁部外面には一段の段がつき、内面には沈線がめぐる。39はやや内傾する口縁部に統けて幅の狭い鍔を付すもので、口縁部外面には3段の段がつく。

綠釉陶器は蛇ノ目高台を有する椀が1点出土している（34）。

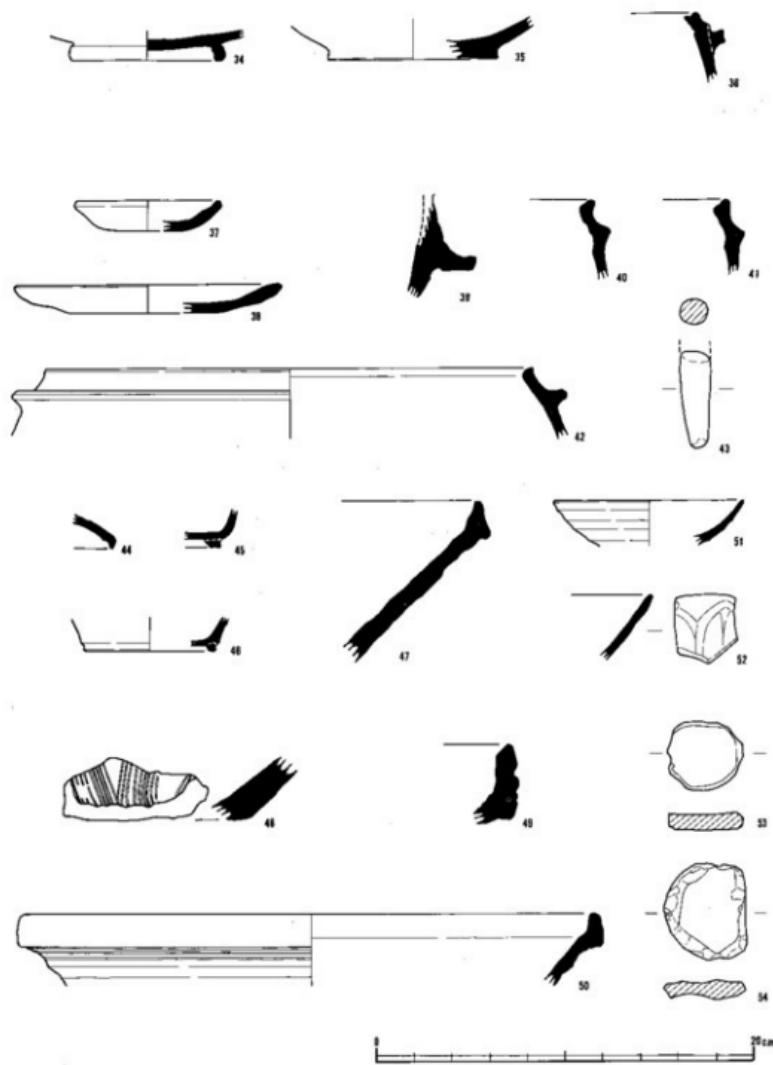
灰釉陶器は、丸みをおびた高台を有する椀で、内面の施釉は全面に及んでいない。

陶器では備前焼と考えられるすり鉢（48・49）がある。48は焼成が悪く、青灰色を呈する。49は口縁部が上方へ拡張し、その幅は約4cmを測る。口縁部外面には3本の凹線がめぐり、内面はくびれが認められる。焼成は堅緻で赤褐色を呈する。

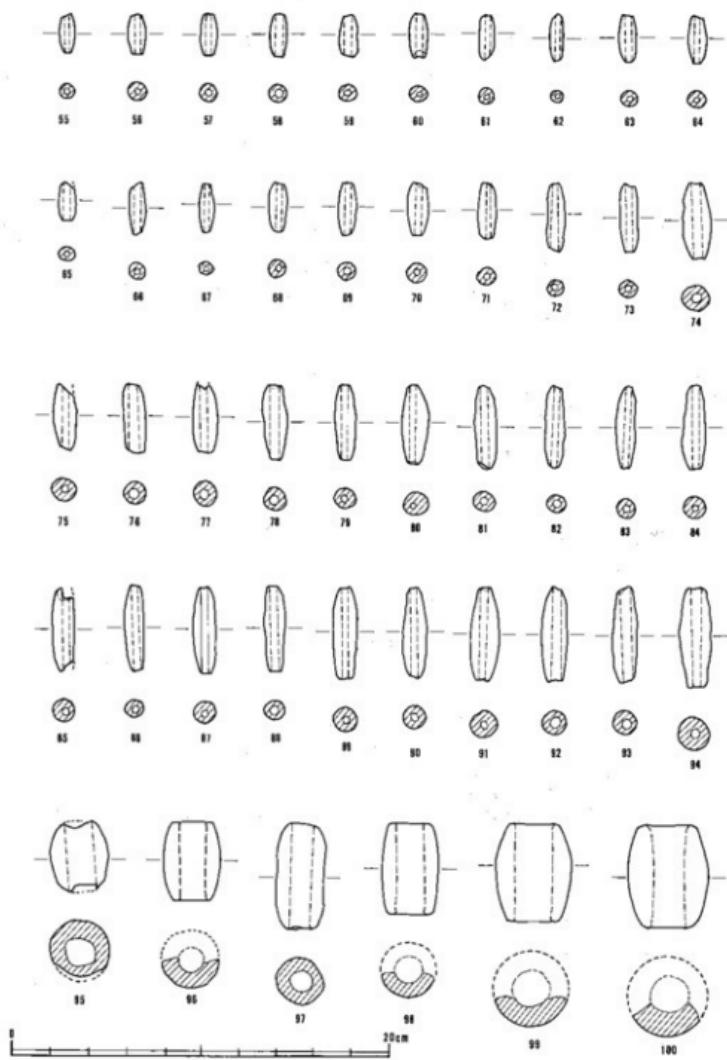
磁器では内面と口縁部外面に施釉された白磁小皿（51）と、外面に連弁文を施した青磁碗（52）が見られる。

これらの土器のうち、34・45・46は平安時代、47・50は12世紀末～13世紀初頭、36・39は14世紀代、40～42は15世紀代、49は16世紀代のものと考えられ、かなり広範囲にわたる遺物が混在していることがうかがえよう。

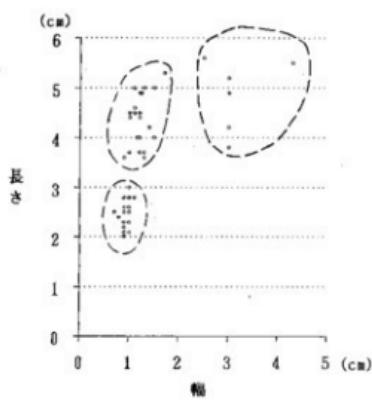
面子には須恵器の体部を用いたもの（53）と青磁碗の底部を利用したもの（54）が1点ずつ見られる。



第27図 中世の遺物



第28図 土錐



第29図 土錘計測表

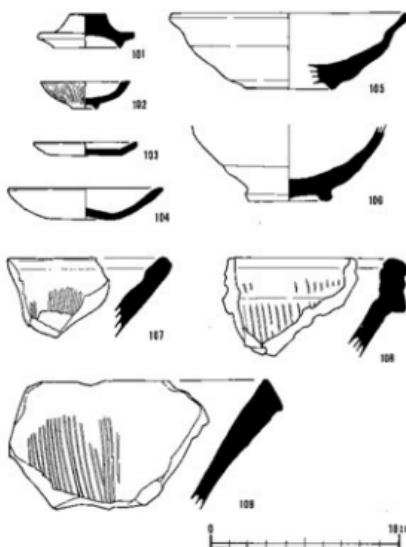
4. 近世以降の遺物

今回の調査では、近世以降の遺物は、I・II層あるいは旧建物の基礎などの擾乱層中から出土している。I層は旧耕作土、II層は旧底土であり、戦前の水田ないしは畠の土壤と考えられる。従って元位置を保ったものではなく、明確に遺構に伴うものも少ない。また、図化できた遺物も第30図と第31図に掲載しただけである。

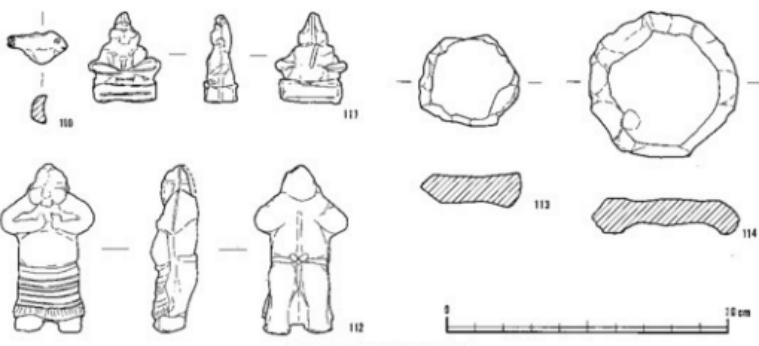
101は、土師質の蓋である。102は、紅皿である。103は柿釉のかかった小皿で底部は糸切りである。口縁付近には煤が付着しており、灯明皿として使用されていたものであろう。104はいわゆるヘソ皿タイプの皿で、指頭圧痕の後内面にナデを施している。外面は調整が不明瞭である。

土錘は多く52点出土している。いずれも管状土錘であるが、幅が1.7cm以下の細長いものの(I類)と、2.5cm以上の比較的ずんぐりしたもの(II類)の2者に大別できる。細長いものはさらに、長さが3cm以下のもの(Ia類)と3.5cm以上のもの(Ib類)に細分できる。重量はIa類では平均1.87g、Ib類では平均6.47g、II類では平均28.07gを測る。

Ia類には55~71が、Ib類には72~94が、II類には95~100が該当するが、いずれの類型においても、出土層位は限定されず、この類型が時期差を示すとは、本遺跡の資料では言えない。



第30図 近世以降の遺物(1)

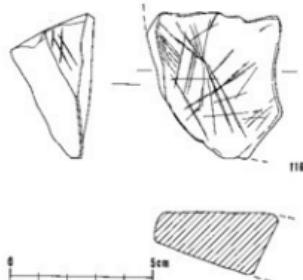
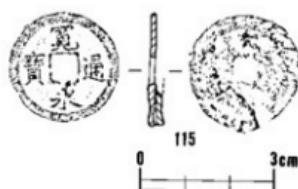


第31図 近世以降の遺物(2)

105・106は唐津焼きの瓶である。105は内面には胎土目積の跡が見られる。底部は厚く作った後中央部を削り込む、「碁笥底」である。畠状遺構を除去していく際に出土した。106は、底部から体部にかけての外面上に見られる「丸かなな」による削りだしが特徴的であり、底部も削り出し高台である。

107~109は擂鉢である。107は丹波焼と思われる。口縁部内面に擂目の上部を押さえるように、円線が1条廻っている。条線は7条以上を1単位とする。108は備前の擂鉢で、口縁は肥厚して上方へのび、口縁部外面には2条の凹線が廻る。外面はヘラ削りが施され、口縁部底面はナデ調整が施されている。条線は9本以上を1単位とする。109は砂質の胎土をした擂鉢で、どこの製品かは不明である。口縁は肥厚せず、直線的に外方に伸び、口縁の端面も平面的である。擂目は10条以上を1単位とする。

110~112は泥人形である。110は魚の形をしている。型おこし整形であり、裏面は粘土を型に押し込んだ際の指頭圧跡が見られる。111は衣冠束帶の座像であり、御内裏様であろうか。表・裏の2つの型を合わせて作られており、側面にその型合わせの跡が見られる。ま



第32図 銭・砾石

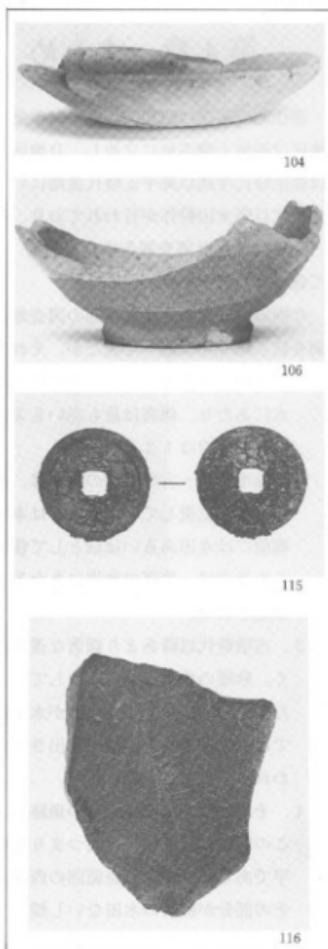
た底部には竹ひごを刺したような差し込み穴がある。112は力士像である。111と同じく、表裏のが貼り合わされた継ぎ目が側面に見られる。110~112のいずれも土師質で、現状では彩色は認められない。

113~114は面子である。113は伊万里焼の破片を加工したもの、114は唐津焼の破片を加工したものである。

その他に図化できた遺物としては、第32図の銭1枚と砥石1点がある。

115は、寛永通寶で、第Ⅰ・Ⅱ層を掘削中に出土した。表面の「寛永通寶」の文字は明瞭であるが、裏面の文字は読み取る事はできない。裏面には、他の銭が鏽びて付着している。

116は砥石で、E 3区の第Ⅱ層から出土している。表面及び側面は良く使用されている。裏面も使用されているが、正面程ではない。



近世以降の遺物

第4章 まとめ

深江北町遺跡は昭和59年度～61年度にはA・B・C・Dの各地区が調査された。A・B・C地区は砂堆上微高地に立地し、D地区は砂堆の後背湿地に立地している。砂堆上微高地地区では弥生時代中期以降平安時代後期にいたるまで集落が営まれ、後背湿地地区では少なくとも奈良時代以降水田耕作が行われており、芦屋川の氾濫で度々埋没している。これらの調査結果は、「兵庫県文化財調査報告書 第54冊 深江北町遺跡」(1988年 兵庫県教育委員会発行)として報告書されている。

今回調査したE地区は前回の調査地点よりも、西に250m離れた地点にある。前章までその調査結果について述べてきたが、それをまとめると以下のようになる。

1. 今回の調査地区は、東西に延びる砂堆上から北に向かって緩やかに落ちていく傾斜変換点にあたり、標高は最も高いE3区の南端で1.5m（東京湾海水準）を測り、中世水田面の北西隅では1.2mである。
2. 弥生時代～古墳時代の遺構は、掘立柱建物・土壙・溝が検出されたが、いずれもE3区の北半に位置している。南半は本来砂堆の上方にあたるため、同一面が何度も使用され、戦前には水田あるいは畑として使用され、削平を受けているためと思われる。今回の調査した地点は、集落の北端にあたるものであり、集落の本体は、調査地点の南にあるものと推定される。
3. 古墳時代以降あまり顕著な遺構は見られず、E2区で検出した中世の水田跡がこれに続く。砂堆の後背湿地に立地しており、南東から北西に向かって下がる6面の水田を検出した。その南端は、砂堆の砂が水田に流入するのを防ぐように粘質土を貼っている。E3区では掘立柱建物や土壙が検出されており、E2区の南端が水田地域の南端となるものと思われる。
4. その後E2区では近世の畑跡が検出された。E2区の西の隅でのみ検出が可能であった。この時期には、砂堆上面つまり弥生時代～古墳時代の遺構検出面と近世の畑の面がほぼ水平である。畑が、調査範囲の西端でしか検出できなかったのは、東の方の標高がやや高く、その部分が戦前の水田ないし畑で削平されていると推定される。

図 版



気球写真(全景)



気球写真(北から)



全景(東から)



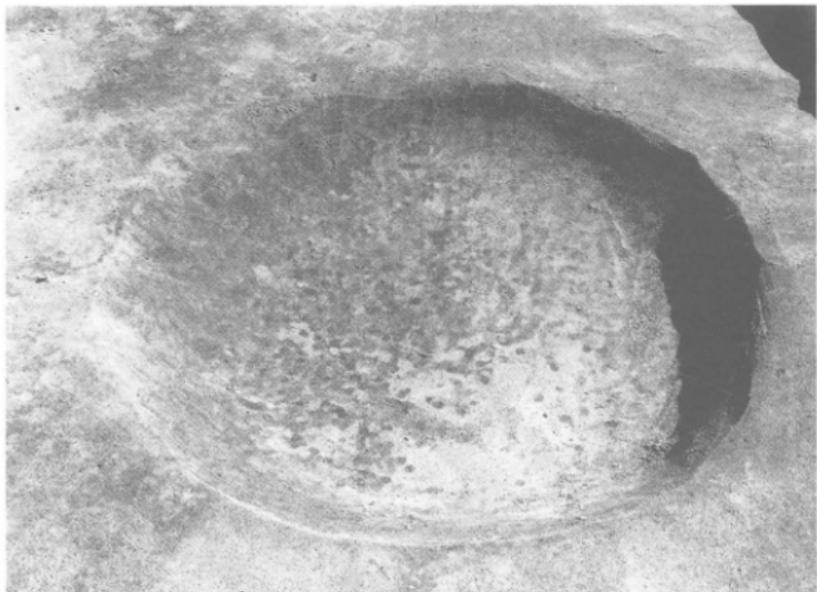
掘立柱建物1(南から)



柱穴 1 (西から)



掘立柱建物 2 (南から)



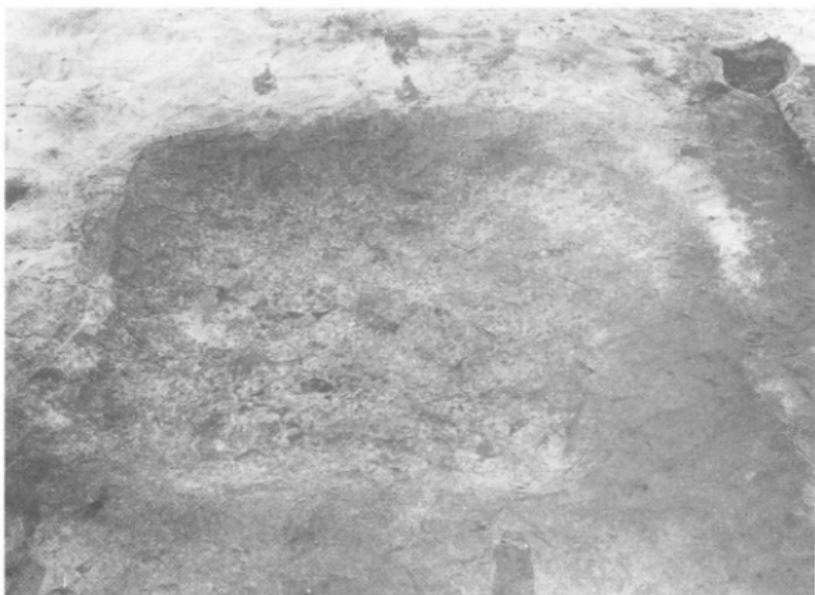
土壤3 完掘状況(南から)



土壤5 完掘状況(南から)



土壤6 検出状況(東から)



同上 完掘状況(東から)



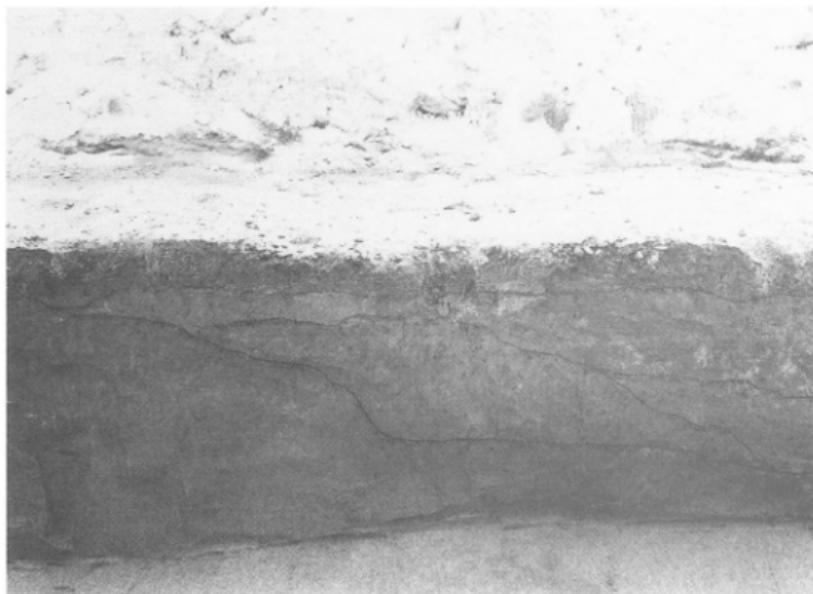
土壤7 全景



土壤7 土器出土状況



水田面(南から)



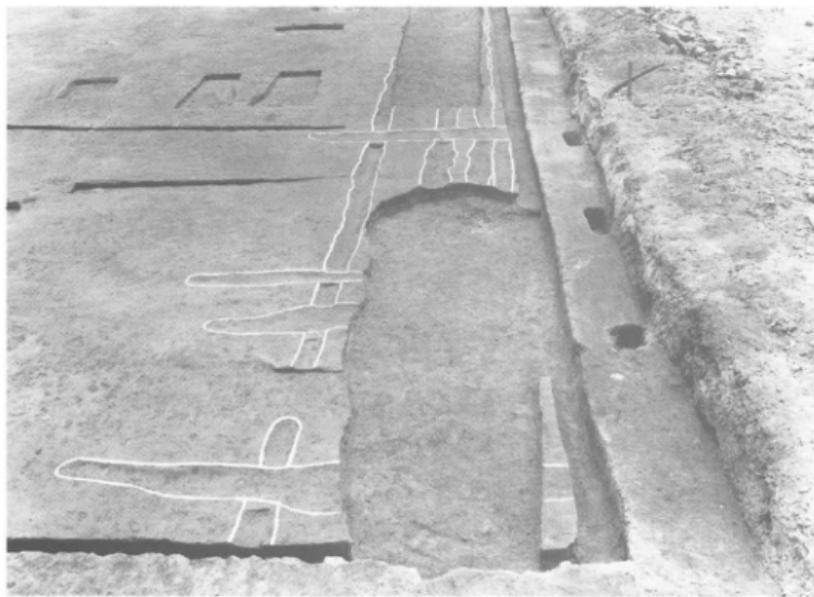
水田南端 土層断面(東から)



竪状遺構 検出状況(南から)



竪状遺構 完掘状況(南から)



敵状遺構 完掘状況(北から)



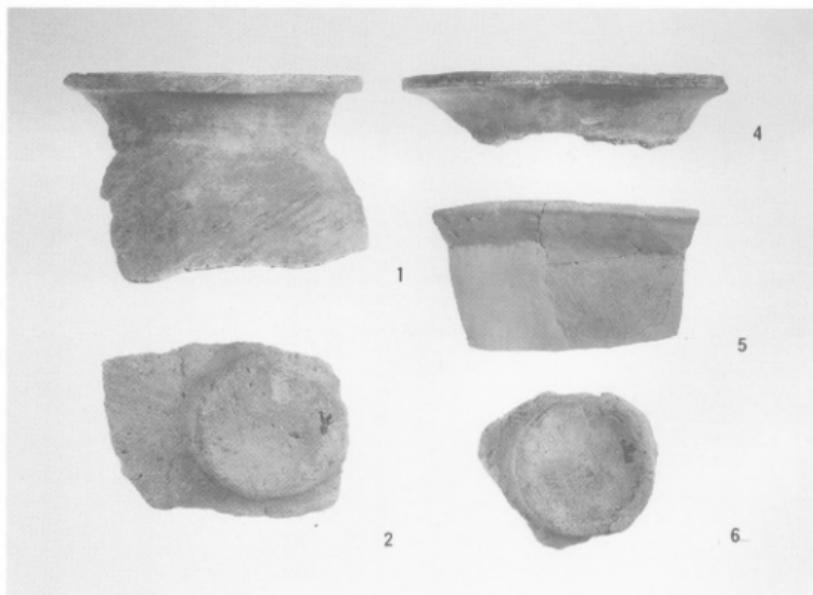
溝6 完掘状況(東から)



溝7 完掘状況(西から)



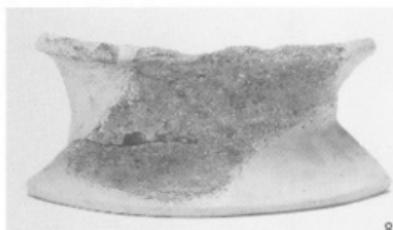
下層(西から)



掘立柱建物1, 土壙 1・2 出土土器



掘立柱建物1 出土土器



8



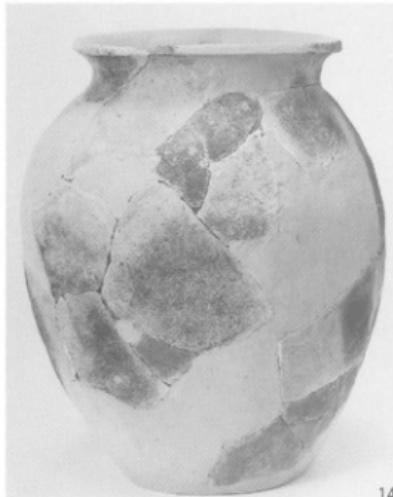
9



10



12



14



13

土壤 6 出土土器



20

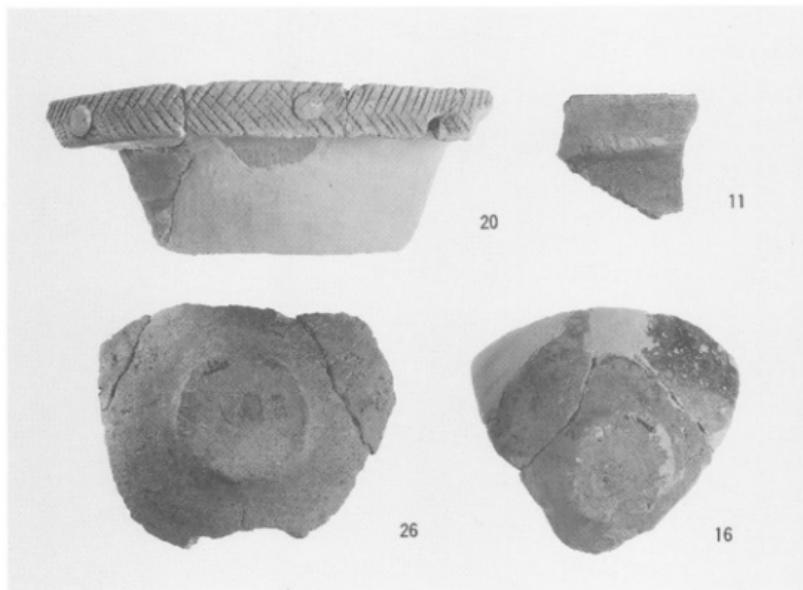


18



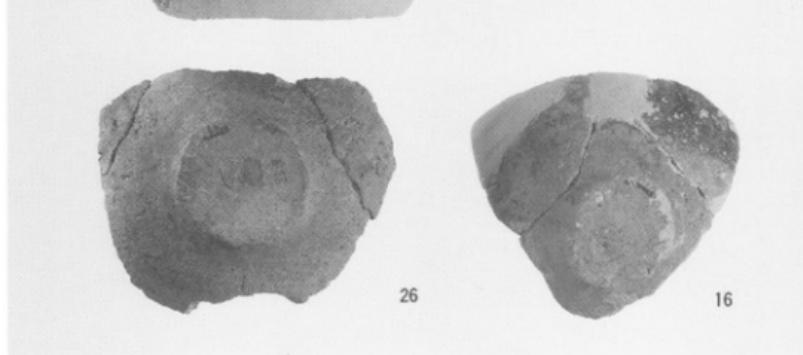
27

土壤 7·8, 包含層出土土器



20

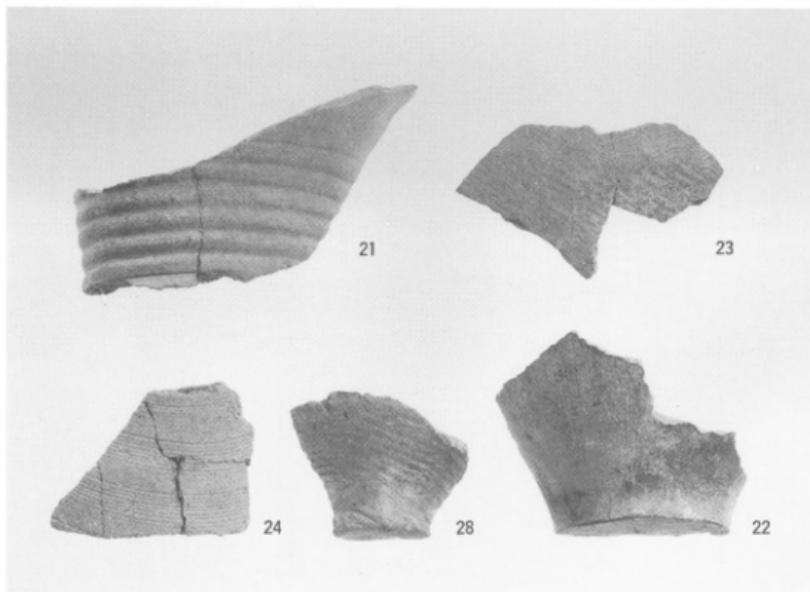
11



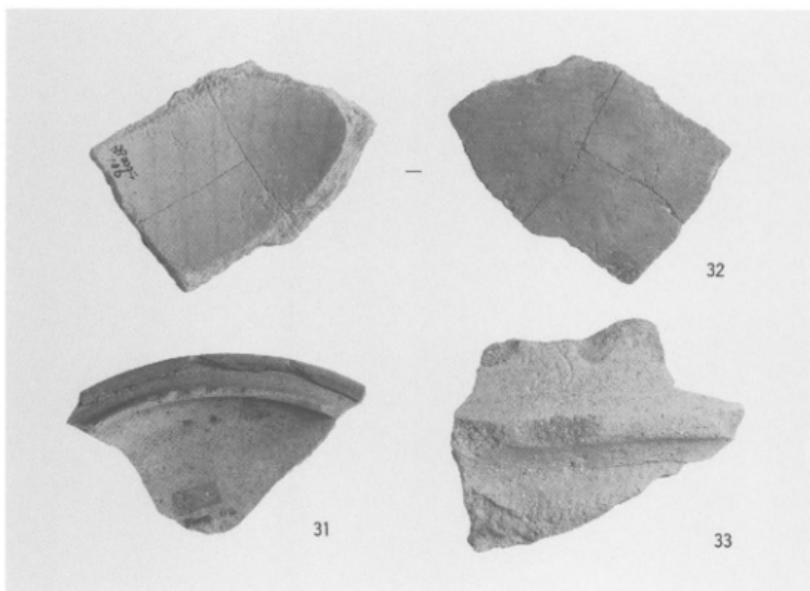
26

16

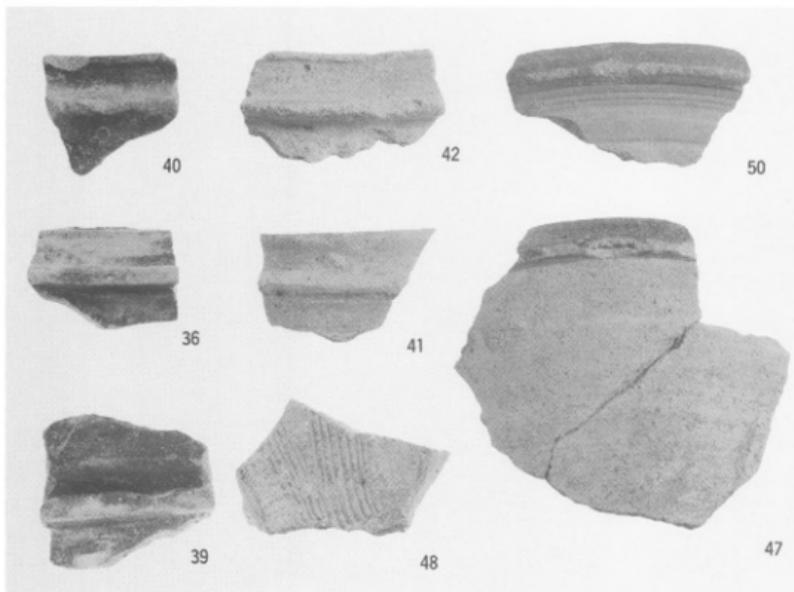
土壤 6·8, 包含層出土土器



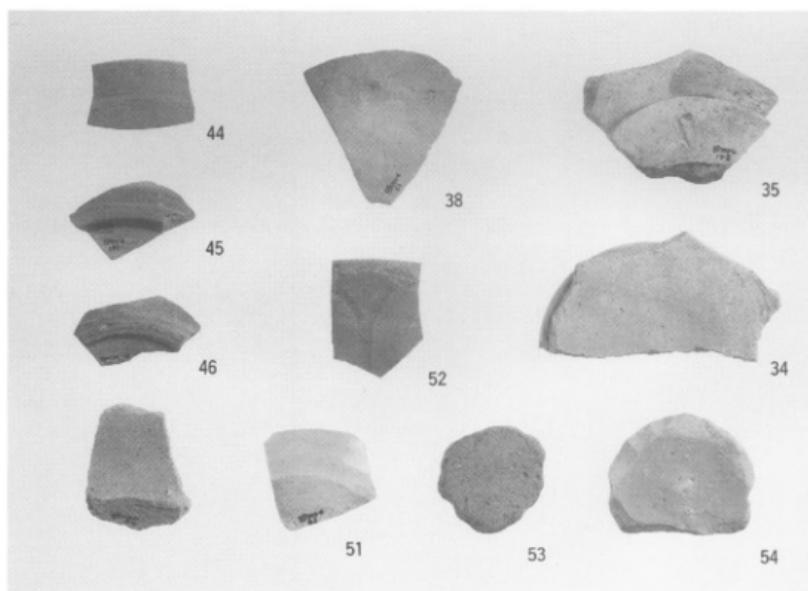
包含層出土の弥生土器



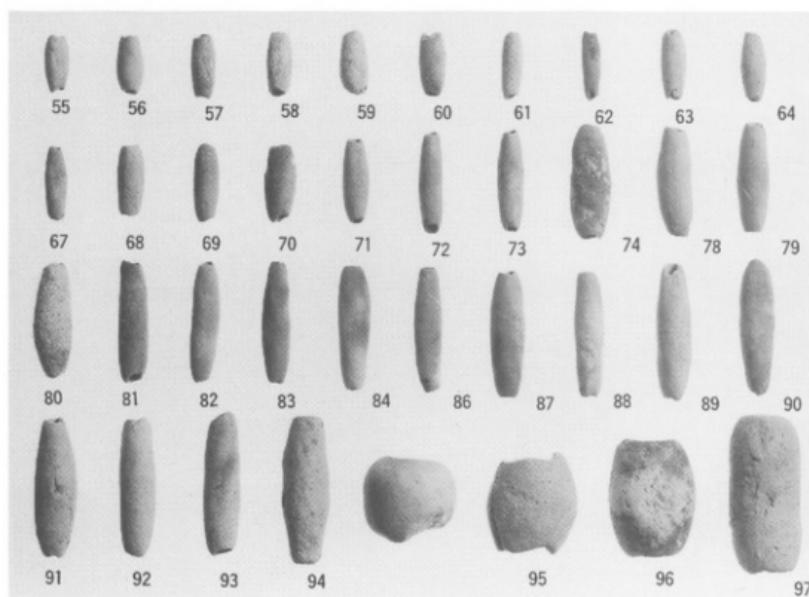
包含層出土の古墳時代の土器



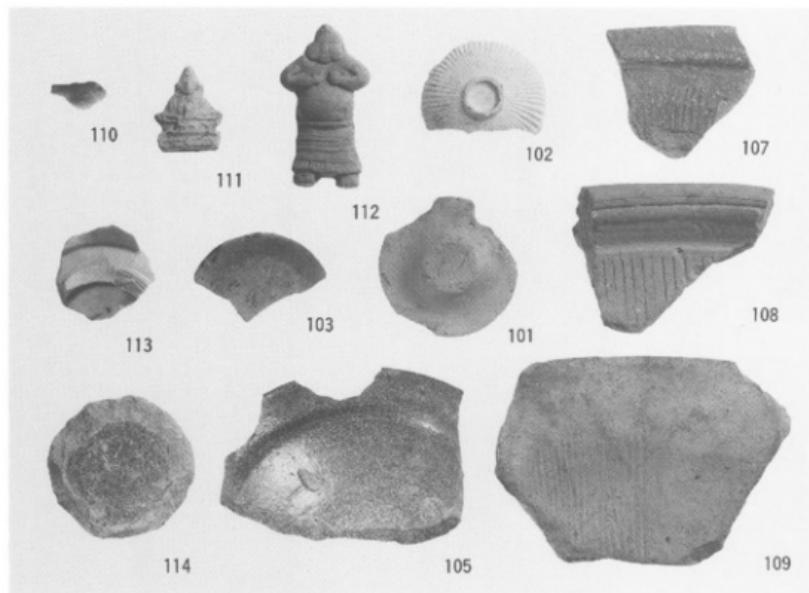
中世の遺物 1



中世の遺物 2



土錘



近世以降の遺物

兵庫県文化財調査報告書 第88冊

深江北町遺跡(Ⅱ)

平成3年3月30日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
TEL (078)531-7011

発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 交友印刷株式会社
〒652 神戸市兵庫区水木通9丁目1-34
